
魔法少女リリカルなのは Edge of Avenger

Hell& Heaven

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Edge of Avenger

【Nコード】

N7548K

【作者名】

Hell&Heaven

【あらすじ】

あの壮絶な戦いから一年以上が経ったミッドチルダはようやくもとの平穏を取り戻しつつある。が、そこにまた新たな歪みが生じた。

復讐という名の牙を研ぎ続けた一人の男が同志とともにミッドチルダに・・・いや、管理局の前に立ちはだかる。

憎悪のキツカケはただひとつの偶然からの必然。

魔法少女

リリカルなのは

E d g e o f A v e n g e r

それは自身を失った男と失いつつある男の物語

第0話 序章（前書き）

初投稿です。とあるモバ○ーで執筆しているものをコピペ（ryしたものです。

まあ気が向いたら読んでいってください。ていつか読んでくださいお願いします。それでは楽しんでいただけたら幸い。

こんな御託はともかく・・・ゆっくりしていいね！！！！

第0話 序章

第0話 序章：始まりは一人の男から

人は誰しも、誇りや、頼り、憧れが少なからずある。

僕は父さんが誇りで憧れで頼りになる存在だった。

父さんは管理局の武装魔導師局員だ

決して、有名な強い人ではなかったけど、僕にとっては一番の存在だった

でも、ある日

父さんは死んだ。僕と母さんを遺して。

僕は父さんの跡を追うように魔導師になろうとした。

幼なじみの者と共に

そいつは母親が管理局の人間。その影響か、共に局員を目指すようになった。

そして、訓練校に通い始めたある日

僕は、父さんの部屋で

ある紙を見つけてしまった

読まない方がきつと良かった

でも、僕はそれを読んでしまった。

そこからだ。

エステイ・ドライという1人の男の

勝手な復讐劇の幕開けは

第1話 開始（前書き）

第一話です。

結構進んでる小説なんです、読み返してみると・・・原作キャラの出番すくねえww
とりあえずcopyしてるので、のんびり読んでくだされ

第1話 開始

第1話 開始：始まりは2人の魔導師から

JS事件後からしばらくたち人々の記憶からも薄れ
戦いによる傷跡も徐々にだが確実に回復しつつある

機動六課解散、マリアージュ事件解決からもけっこうな月日が経過
していた

ミッドは平和そのもの
だが、そんな平和を崩壊させるカウントダウンが確実に始まろうと
していた

ここ、場所は管理局

今、2人の年若い魔導師が昇格試験に臨もうとしていた。

1人は男

名をゲイル・マリオネット、短髪の黒い、サッパリした髪型に黒縁
のメガネ白いバリアジャケットに黒いマントを羽織っている。手に
しているデバイスは…剣だろうか

もう一人は女

名をレン・ヤマグチ肩まである若干カールがかった茶髪。ゲイルの
白いバリアジャケットとは対照的に暗闇を連想させる漆黒のバリア
ジャケットを羽織っている
手にしているデバイスは錫杖

「いいですか？試験は、迫り来るダミーをかいくぐりながら時間内にターゲットを全て破壊後、ゴールにたどり着ければ合格です！」

ゲイルとレンの前に人差し指を突き立てながら試験内容を説明しているのは腰まである銀髪に青の瞳の少女…というより小人。

…本人が睨んでくるので少女にしよう。

リインフォースである。

「質問。」

「はい、何ですか。」

質問を投げたのはゲイルである

「ダミーってのは全部破壊？それとも無視おけ？」

「もちろん全て破壊しなくてもいいです、ですが、一部ダミーがターゲットだったりしますです。ですからそう言った物は無視できないです。」

「了解。」

「そちらのあなたは質問ないですか？」

「私は、特には。」

「では、始めますです。準備はいいですか？」

「ういっす。」「はい。」

リンフォースの真横にタイマーが現れる。

「では、用意…始め…!!」

「行くぜ相棒」

【イエス。】

「ヴェルヴェット。」

【さあ、始めるか姉弟^{きょうだい}】

2人の魔導師は翔けた。そう、文字通り飛んだのだ、空戦に該当するのだが、彼らは一応陸士として訓練を受け、陸士として昇格しようとしている。つまり空士への通過点だ。

「レン、打ち合わせ通りな。」

「分かってる、私はあくまで後方砲撃に専念
攻めは、ゲイルでしょ」

「そ。先ず一体…おらあ！」

会話は終わったか、レンは後方へと下がり魔力を高める。

ゲイルは自らの剣

ライトブリンガーをその手にダミーであるガジェットを両断。

だが、ダミーは1つではない。

どんどん群がってくるのだ。

「珍しい2人組だな」

ゲイル、レンが映るモニターをリインフォースと眺めるこれまた小ささ…ゲフンゲフン

少女。…あんま変わってないか、睨むな。

赤い髪を三つ編みにおさげに下げた少女
ヴィータが口を開く。

「はい、二人とも空士の資質がありますです。」

「でもま、それだけじゃこの試験は通過できねーけどな。」

そう、まだ試験は始まったばかり。

「スターダスト・レンブ！」

形成した魔力スフィアを叩き拡散してゲイルの周りのダミーに叩きつける。

元々至近距離で当てる技のため威力は下がるが足止めには十分。

「ターゲット…あれか!？」

せいっ！」

スターダスト・レンブがダミーに当たる瞬間。ゲイルは頭上に浮かぶマークを捉える。

剣を振り抜く。その剣閃は光の剣となり目標を射抜き破壊する
光刃閃。先ほどのダミーを容易く両断できたのもこれのためでもある。

「ゲイル。ダミーを引きつけて、纏めて打ち抜く。」

レンの前には既に凝縮された黒い魔力のスフィアが形成されている
「了解！俺は打つなよ？（笑）」

「考えとく」

「え！？ちょ、ま」

ドバーーン！！！！

「あいつら……！」

「減点です！」

ヴィータは彼らの行為に対し怒りに顔を歪める。

まあ当然だ。一歩間違えば味方を巻き込みかねない危険行動。

そんなこんなで試験は続く

試験開始から半分以上経過

ターゲットはほとんど破壊され後僅か。

「せえやああああ……！」

猛々しい唸りと共にゲイルはダミーを両断する
流石に疲労が見え、先ほどのキレは無い。

「ゲイル、大丈夫？」

「ああ、なんと」

「ああああん……！」

「……！？」

けたたましい音と共に現れたのは巨大なダミー
その人の大きさを軽く超えたサイズ

強固なシールドをそのボディに纏っている
AMF 装備でないのが幸いか

AMF アンチマギングフィールド
その名の通り、魔力の結合を無効化するフィールド。
である。

「へ、上等だ。レン、【アレ】で往くぜ」

「まさか…？」

「そのまさかだ。」

「ば、馬鹿！？こんな大群相手にできる訳ない、それに【アレ】は
強て」

ゲイルが言葉を遮る。

「だったら、尚更だ。俺が全力でお前の詠唱を守るから。これしかない。」

「……分かった。」

そう言うとレンはすぐさま後退する。

当然ダミーが追う、が。それは瞬時に両断され

「てめえらの相手は、この俺だ」

騎士の剣を持つ一人の男が吼えた。

大型ダミーの出現に空気が変わる審査陣

「運が悪いな4分の1のハズレ引くなんて」

「AMF装備が無いだけましです。あの装備なら力技で破れますです」

「問題は、どう破るかだな」

空中、レン

「詠唱短縮化

詠文 コード 圧縮

陰…陽…
」

地上ゲイル

大型の予想以上の性能に苦戦を強いられるゲイル

「ちっ…堅い…光閃刃も弾くとはな…」

先ほどから何度か光閃刃を纏う斬撃をぶつけるがシールドはびくともしない

「やっぱ…時間稼ぎにしかないな

月交 サテライト …接続 リンク
」

自身の力の名を小さく呟いた

誰にも気づかれぬよう

「ライトブリンガー、頼む」

【了解。アンチ・フェルト。】

ゲイルがデバイスに命じる。

その瞬間、彼の周りを不可視の魔力の薄膜が覆う。

ゲイルの剣が形を変える。杖だろうか。白と黒が基調となっている。柄が白で先端に黒い装飾。

くそ…レン。まだか！？

空中

「光…闇…柔…剛…相反。

圧縮完了」

彼女の前には黒い球体

準備完了！いつでも行ける！

地上

「行くぜ。相棒」

【了解、サテライトモード】

杖先端の装飾は形を変える。それは花弁開いた花のようだ。ただ中央には細い長い針のような突起がある。

「一意…専心…！サテライトオオオ…」

突起の前に圧縮された白の魔力スフィアが現れる。

レン、行けえ！！！！

空中

「貫く！」

ルナティック・サンシャイン！！！」

球体を叩く。そこからは強烈な砲撃。

全てを黒の旭光に包もうと巨大ダミーに襲いかかる
地上

チャンスは一瞬

それは今。

レンの砲撃がシールドに直撃する。その瞬間ゲイルはダミーの懷に入り込む

「ブレイカアアアアア！」

魔力スフィアは爆裂する零距离砲撃へと

完璧。決まった。

ゲイルが勝ちを確信した

それと、同時に油断が生じた

そのとき、巨大ダミーはその刹那魔力砲撃を放った。
開けられた穴へ

そう、当然その軌道にはレンがいた

レンは砲撃を撃った

「え　？」

ゲイルのトドメに崩れる筈の相手はこちらに何か光を放つ。

それが砲撃と気づくのにかったのはコンマ数秒。手遅れには十分だった

彼女の瞳にはただ一つ、彼女を狙う光が迫る、片手を前に出す。

だが遅い

魔力をたぎらす

もう遅い

砲撃はレンへと当たり爆風が吹き荒れる。

彼女は力を失いその場から落下した。
意識は、そこで途切れた

S I D E L E N

「ん……。」

目を覚ます。見えるのは天井、居るのはベッド
管理局の医務室

ああ、そうか

「私、堕ちたんだ。」

恐らく結果も絶望的だろう。

その時、医務室の扉を開く音がした。

「！！？…大丈夫か！？」

入ってきたのはゲイル、私が反応したと同時に血相を変えて駆け寄る。

その時さりげに胸に触ったのを私は見逃さなかった

「ウギャブ！」

「糞変態が。」

何をしたかは想像に任せます

「……悪い。」

「煩い変態。」

この変態は…何度繰り返せば

「ちげえよ。詰めが…甘かった。」

神妙な面持ち。久しぶりだ。コイツのこんな顔は
ふと私は気づいた

「……私…さ…」

「ん？」

「実戦なら…死んで…た…」

震えてきた。

心の底から

涙が流れてきた

「ごめんね……」

「ろっぜ……」

ゲイルが何かつぶやく

「え？」

涙で滲む視界でゲイルを見る

「次は……半年後は、頑張ろっぜ」

「……………。うん…………。うん。」

また涙が流れてきた。

ミッドチルダ某所

「ぐああああああ」

響き渡る絶叫。

「……………。」

凶刃煌めかす1人の青年。

その周りには数人の気絶した局員

今対峙しているのは藍色の髪、リボルバーナックルをその手につけ、

相棒のマッハキャリバーをその脚につける

スバル・ナカジマ

「弱い」

青年が呟く

同時に地を蹴る。

「！？」

凄まじい速さだ。

普通の者にはまさに一瞬。

蹴りが近づく。避けきれない。

「うあっ！」

リボルバーナックルでなんとか受け止める。

勢いは止まらず壁に激突。

「その程度か、局員。」厭な笑みが浮かぶ

「うおおおお。」

マッハキャリバーが地を削る

「遅い。」

「!?!」

その瞬間スバルは腹部に凄まじい衝撃を感じた。

「がは…。」

そのまま壁に激突。

「弱い。これならば管理局を潰すも容易い。」

「管理…局…を…?」

霞む意識で懸命に目の前の敵を見据えるスバル。

「これは余興だ。僕らは貴様らを管理局を叩きのめす。帰って報告でもするんだな」

青年は背を向ける。

攻めるなら今。

「待…て…」

一瞬だった駆けつけてから本当に一瞬だった

そのままスバルは倒れ臥した
同員はおろか自分すらも者でもない強さに悔しさを滲ませながら。

第1話 開始（後書き）

第一話ですお楽しみいただけただけでしょう？

モバg（ryのほうではあんまり伸びてなくて・・・

だがあきらめない、レビューがいただけるその日まで！！！！！

第2話 拡大（前書き）

第2わあああああああx（ryすみません取り乱しました。

さて、待望（？）の第2羽です。失礼2話です。

日々PCの糞変換能力と闘っております。好きという変換すらできません。どうなるかという「巣責」こんな感じ。

まあ、そんな無駄話は置いておいて・・・

ゆっくりしていいね!!!!!!!!!!!!!!

第2話 拡大

第2話 拡大：きっかけは一つの出会い

暗い、どこだろうか。

どこかの一室だ。

光が漏れる。扉が開いたのだ、その向こうからは一人の青年。その瞳は何かが足

りない、それを渴望するようにギラギラ光っている。髪型はこれでもかと言うほ

どツンツンし、右耳にだけ水色のピアスをつける。の割に服装はYシャツに黒いズボンとピッチリした印象である。

暗闇にも関わらず慣れた手つきで明かりをつける。

明るくなった部屋には1人の女がいた

「……おかえり、エスティ」

彼女は顔を伏せてエスティと呼ばれた青年に話しかける。

「明かりもつけずにどうした。マリ」

エスティは女に返す

「…うん…。」

マリと呼ばれた女は答えないひたすら首を横に振るだけ

「そうか。」

エスティはそれ以上何も言わず椅子に座る。

その目は先ほどのギラギラは無い、目の前の女をいたわる瞳だ。

「「……………」」

沈黙。

「夢を…見たの」

マリが口を開く。顔を上げる

その顔は一言で言うなら

酷かった

かつては端正な顔立ちだったのだろうが、肌は焼け焦げた跡でメタメタでおまけに口と鼻の間に醜い一文字傷。とても女性とは言い難かった。

「……………そうか。」

暗に何も言うなと語るエスティ。だがマリは続ける

「アイツラにひたすら殴られるの…」

「言うな。分かってる…分かってる。」

言葉を遮るマリに近づきそつと抱き締める。震えていた。

断っておくが彼に恋愛意識は無い。むしろ兄弟愛に近いが、彼女の方はその逆だ。つまり鈍いのである

「さっき、局員を叩いてきた」

「始めるの？」

「ああ。だが無理に付き合う必要は無い」

「ワタシは一度死んだ。死体　ワタシ　を拾ったのは貴方でしょ？」

「無粋だったな。許して欲しい。」
「うん。」

しつこいようだが彼に恋愛意識は無い。

「ま、当然だよな。」
「うん。」

廊下を歩くレン、ゲイル

レンの体は比較的ダメージが軽く直ぐに病室から退室となった。
そのため試験の結果を聞きにいったのだ

結果は予想通り、不合格

「訓練感覚で臨むんじゃない。味方を巻き込み兼ねない攻撃。詰めを誤って不意を討たれ撃墜。てめえら舐めてんのか？」
そうヴィータからお叱りを受けたのだ

「すげえ、怒ってたな。」
「うん。」
「どうした？」
「うん。」
「？。俺、持ち場戻るから」
「うん。」

ゲイルは顔に？を残しながら先を行った

レンは考えに耽っていた。謎の襲撃者…。
スバル・ナカジマを一瞬にしてのした人物
結果通知書を見つめる。が、浮かんでくるのは1人の男の顔

断っておくが別に恋しいではない。

「私も行かなきゃ」

結果通知書を置く。

前を向く。

「……エステイ……」

断っておくが別に恋しいではない

この頃管理局ではある噂が専ら広がっていた

テロリスト、復讐者、凶人、未だ情報少ないなか噂は広まるばかり

「せっかく、平和なのに、落ち着いて生活できひんのかな……」

そう、管理局のためK…ゲフンゲフン

八神はやて。

機動六課解散から、フリーの特別捜査官となって現在密輸など様々な取締役を担っている。

が、今は大きな仕事が無くやっと暇ができた途端にこれなのだ。そりゃ愚痴るのも無理はない。嫌な予感がする。

「しばらく、仕事もあらへんし……少し調べてみよ。」
やっぱり。

事態は確実に拡大している。

「フェイトさん、今戻りました。」

スバルの元から戻ったティアナ、まずは現在の上司である同じく腰までストレートに伸ばした金髪の女性。フェイト・T・ハラオウン

「おかえり、スバルは大丈夫だった？」

フェイトは柔らかに笑みを浮かべながら彼女に返す。勤務中である中、彼女がスバルの元に行くのを許したのはフェイトだった。大事な友人が怪我をした気持ちを汲んだフェイトなりの配慮だ。

「あの、有り難うございました。」

「ううん、私もなのはが怪我とかしたらいてもたっても居られなくなるから……」

ゆっくりと首を振り気にするかと笑う。フェイトらしい

「フェイトさん、それでスバルから得た情報なんですが」

時刻は昼過ぎ、飯時も過ぎ街は落ち着く時間帯。

そのなか、エステイの姿はあった。

彼が向かう先は、ある道場

別に門下生ではない、所謂道場破りとは行かないが、飛び入り参加と言った所か

ちなみにその道場……

「失礼する。」

稽古が行われていた道場の空気が止まり、視線という視線が彼を射抜く。が、彼は全く動じない。

「門下生ではないようだが、ここに何の用だ？」

最初に声を上げたのはピンクの髪をポニーテールで纏めた、凛々しい顔の女性。

シグナム。

今日は非常勤の講師として来てるらしい。

「ここの評判を聞いてな。自分をひっぱたくのに最適だと思ってな。」

随分と抽象的な返答だ。周りがざわめき始める。

「気まぐれの相手をするほど私は手は足りていない。きちんと手順を踏んで出直せ。」

突然の訪問者にも彼女は凜と声を発した。

まあ、無礼者には手厳しいからなあ。

「アポなら取った。破ったのはそちらだ。僕も相手がお前で驚いている。」

そんなシグナムの返答にこちらも動じない。

「先生の客か？……失礼した。察しの通り彼は今留守だ。すまないが出直してくれ」

「その必要はない。先ほども言ったが、僕を叩ける者ならば十分だ。」

シグナムの言葉に首を振る。

「そうか、私で避ければ先生の代わりは勤めよう。」

そう言うとな彼女は周りの門下生を中央から外して自身とエステイを中央に。

「助かる。近々大勝負があつてな、この天狗っ鼻を叩き割って欲しい。」

「私で事足りるならば承知した。模造刀はあるか？」

「いや、そちらで借りる話はつけてある。」

シグナムは頷くと彼に人振りの木刀のような物を渡す。

刃渡りはおよそ1m弱、普通の剣と同等だ。

彼は二、三回振ると顔をしかめた。

「不服だったか？」

「常に二刀でな、一刀は真の重量でなければ狂う。」

そう言うとな彼は模造刀を置き近くの低年齢の門下生2人から先ほどより幾分短い60cmほどのそれを借りる。

「二刀…か…。」

シグナムは思わず笑う。

「手加減は無しで頼むぞ。」

エステイは腰を低く落とし両手の模造刀を左右に広げる様に構える。
「無論だ。」

二人の剣士は向き合い、弾けた。

バキッ

ドサア！

「勝負ありだな」

倒れたエステイの喉元に模造刀の先が突きつけられる。

「そうだな、感謝する」

立ち上がり、シグナムに笑いながら一礼。

「確かに、油断と慢心で剣がぶれている。また鍛え直すといい。」

「ああ、そうしよう。」

そう言っていると彼は門下生に模造刀を返す。

彼らは目を輝かせ

「かつこよかったです!」

「僕にもそれ教えて下さい!」

などと口々に言う。が

「基礎もないうちに亜流が混ざれば、それは粗悪になる。その前にしっかりと彼女に教われ。」

そんな彼らを諭すように言い放った。

「そうだ。まずは基礎だ、見学は終了。鍛錬に戻れ。」

シグナムの一喝で門下生は一挙に初期の体制に戻り、各々開始する。

「世話になった。」

「いや、あいつらにも善い勉強になった、こちらこそ感謝する。」

「いや、僕の汚い剣は彼らに見せて善い物ではなかった。」

「……………」

「ふ…じゃあ、失礼する」

シグナムの疑問を横に彼は自嘲気味に笑って扉を開く。

疑問を残したまま彼の後を見送り、シグナムは自分の役目へと戻った。

「今、戻った。」

場所はここ、ミッドにある八神家。

「おう、おかえりシグナム。…なんか嬉しそうだな。」

出迎えたのはヴィータ。彼女を見た途端、怪訝そうな顔。それもそうだ、仏頂面の彼女が今日は笑が多い。

「そうか? 変わらぬつもりだが。そう言うヴィータもなにやら機嫌

が良さそうだが？」

知らぬは本人のみとはこの事。
お互いに笑みが多い。
なんともシユールな…

「まあな、面白そうな新人が来た。落としたけどな。」
「なるほど。」

居間に入る二人に書類が多々ファイリングされたファイルを持った
はやてが振り向く。

「あ、シグナム、お帰り。」

「はい、戻りました。……調べ物ですか？」

「ちょっとなあ、ここ数年の事をちよろつと……？
なんかええことでもあつたんか？」

自身の言葉を遮りシグナムの変化に気づいたか

「……はい、道場に訪問者が来まして、少し手合わせを。」

「どやった？」

「とても、澄んだ太刀筋でした。きっと良い師と仲間がいたのでし
よう。」

シグナムの言葉は妙に嬉しそうだ、恐らくフェイトの時以来のあの
剣戟の打ち合いに浸っていながらなのだろう。

「そっかあ、シグナムお墨付き、うちも会ってみたいわあ。」

「機会があれば是非。」

主の眩しい笑顔に微笑みを持って返す。

が、彼女の中には彼の意味深な言葉が渦巻いていた

事態は確実に拡大している

第2話 拡大（後書き）

どうでしょうか Edge of Avenger 第2話

楽しんでいただけましたら幸いです。

気になるエスティの戦闘能力ですが、今ここでお見せするわけには
いかないので

無理な省略をしました。

あ、ごめんなさいごめんなさい、行かないでえ！もう少ししたら絶
対拝めますので！

ごほん、では頑張っていきますので、どうぞよろしくおねがいしま
す。

あ、見てくれた方は何かしらアドバイスなり、なんなり、感想、誹
謗中傷なんでもよいので書いてくれるとうれしいです。

では第3話でお会いしましょう！

第3話 各々（前書き）

こんにちわ、第2話から実に数分ほどでコピ（r）yしてきました。

またお会いしましょうなどと抜かしておいてすみませんでした。

はてさて、友達に「文才すげえwww」などといわれたのを思い出しながら、一人ニヤニヤして現在文章を綴っておりますwww
すみません、調子乗ってすみません、だからそのナイフを振りかぶるのは止めてください。

で、ではそんなこんなで・・・

ゆっくりしていつてね！！！！！

第3話 各々

第3話 各々：各人は動き始める

【俺は認めない】

「なんでー…」

何故か敬語発しないインテリジェントデバイスとその担い手。
場所はミッドチルダから外れにある森。漆黒のロープのバリアジャ
ケットを着ている。

「いいじゃない…私の何が間違ってるの…!!」
何やら不穏な空気です

【それはな…】

俺を剣にするって事だ!!!】

「だって、だって、かっこいいじゃん!」

【第一、お前は遠距離だろ!意味わからんし】

「う、うるさいな。マスターは私なんだよ！？ちゃんとしたがってよ！」

ぎゃあぎゃああと一人と一機はコミカルに喚き散らしている。周りが森なだけに、かなり響き渡っている…。

こいつら…

まあ、頑張って新技でも一つよろしく。

場所変わり、時空管理局はやてはとある所を訪ねた。

「こんにちはー。」

「これは八神二佐、どうしました。」

「ちょっと調べたい事あってなー、この条件に一つでも該当するデバイスの情報
を纏めて欲しいんよ。」

胸ポケットに手帳を切り取ったほどのサイズの紙を取り出す。

「拝見します。」

剣：所在不明… 殉職者所有…

分かりました。情報はどちらに、それと日時の方は？」

局員ははやてから受け取ったメモを受け取ると、フレンドリーな彼女に対し、姿勢を正しながら生真面目に答える。

まあ、上司と部下だから仕方がないが

「せやなあ…私の端末の方に頼むわ。期間は…なるべく、今日か明

日にできると
嬉しいわあ。」

「分かりました。出来次第、そちらに送信しておきます。」

愛想笑いではあるも、柔らかい笑みを浮かべてコクリと頷き彼女の
メモを自身のデスクのファイルに挟む。

「頼むなあ、ほなお仕事頑張つてな。」

「はい、八神二佐も調査頑張つて下さい。」

ヒラヒラと笑いながら手を振りながら部屋を後にするはやて。
この人は本当に何考えてるのかわからない。

「はやてちゃん、あんなの調べてどうするですか？」

お、小さい幼J…ゲフンゲフン、リインフォース。
はやての傍らに現れる。

「今まで、野心とか自己顕示欲とかの戦いはあったけど、復讐つて
のはなかった。
スバルからの情報は武器の形状だけやから、どーせならって思っ
てな。」

なんだか、難しい。

作者ですら分かりません、なんて事は無い。

「なるほど、流石はやてちゃんです!」

…… 本当に理解してらっしゃるのだからか。

拳を手のひらにポンツと置いて納得したような素振りを見せている

「んー情報は少ないしなー。」

スバルから分かった事は武器の形状のみ

顔などは見えなかったらしく、髪型が少々派手だった気がする程度らしい。

ここから人物の特定は難しい。せめてデバイスは特定しときたいの
だろう。

「でも、はやてちゃん。ここからどーするんですか？」

そう、いかんせん情報が少なすぎる。

捜査なんてできない。

「せやなあ、しばらく保留や。これ以上はちよつとな。」

そんなこんなで時間は過ぎる。

はやてが仕事を頼んだ局員の仕事が早く、データがはやての手元に
来たのは昼を

過ぎて少しした後だった。

場所変わり、ここゲイル宅

「あ、アレって今日か？ライトブリンガー。」

昼飯の支度をしながらふと、そんな事を尋ねた。

【いえ、まだもう少し先です。】

「ふーん、ま、今日だろうと明日だろうとキツいのは変わらんか…。」

フライパンを回しながら呟く。

【お知り合いを呼ばれては？】

「知り合い少ないの知ってるだろ？てゆーか、レンしかいねーし調味料を叩き込んでく。」

てか、レンしかいないって・・・かいてて哀しくなってきた・・・

【すみません。】

「謝ること無いって。」

昼飯完成。

「それに、アイツにあんなところ見せても、しょうがないだろ？」

【そうですね。】

出来た昼飯を口に運ぶゲイル。

「そゆこと、お。会心の出来。」

【マスター。】

「あん？」

【マスターの言う【あの人】に会わなくていいんですか？】

「……そのうち会えるさ。俺がもっとでかくなれば。ま、向こうは俺の事なん、覚えてないでしょ」

【そうですか。】

「そうそう、わざわざ俺が局員になったからって、会いに行くほどの事じゃない。」

その後、カチャカチャと食器の音だけが響く。程なく食べ終われば食器洗う。

戸棚から錠剤の入った小さなビン（イメージ的にはアリ ミンV的）を手に手に取る。

立ち尽くしたまま、しばらくその錠剤の小さなビン（イメージ的にはアリ）見つめるとそれを戸棚に戻した。

場所、ミッドのどこか。

「で、どおするのお？」
なにやら話声が聞こえる。

「この間、僕の襲撃に少なからず警戒してる奴らはいらる筈。まずは奴らをかき回す」

話しているのは4人。

「でもよ、本当に4人だけなのか？流石に無理があんじゃない？」

そう話すのは銀髪をした髪をひとえに後ろで纏め、黒のガウンを羽織り、サングラスをかけた長髪の男。

「そうよねえ。いくらアタシ達が強すぎても流石に無理なんじゃない？」

銀髪の男の腕に抱きつく、茶髪の髪を肩まで伸ばし、お前は中身を晒したいのか？と突っ込みを入れたくなるくらいの短いミニスカートを吐いて大きな胸を強調するかのような胸元露出したワンピースを着た女。

「うん、確かに直ぐには終わらないだろうけど、勝利は流石に。」

マリも言いづらそうではあるが口を開く。

「僕らの目的は勝利じゃない。奴らの壊滅だ。倒すばかりが勝利勝利じゃない。」

頬杖ついたエステイ、突き出された【4人】という事実などまるで関係ないともいいたげに

「ま、人数なんて関係ないわよねーあのイカレ科学者のおかげでガラクタはたーくさんあるし」

「まだ蓄えておけ、当面はしばらく僕一人が動く。」

「うん」「あいよ」「はい」

「フェイトさん、次のお休みっていつですか？」

フェイトの自宅にて定期的な親子の通信が取られている。相手はもちろんエリオとキャラ口である。

「今度の休日なら多分空いてるよ、どうして？」

「エリオ君と話して、次の休みに遊びに行こうか相談してたんです」

「この日付なんですけど、僕たち今回ちょっとまとまった休日が貰えたから、フェイトさんが休みならって。」

「うん、その日なら大丈夫だよ。遊びにおいで。」

につこりとにやかな笑みを浮かべ、返事を返すフェイト。

画面の向こうの2人も笑っていたが、不意に表情が暗くなる。

「フェイトさん、最近なんかそっちは物騒みたいですけど大丈夫ですか？」

少し暗い調子でエリオが尋ねる。キャラ口も心配そうである。

「うーん、今のところはね。はやてが今、犯人の事を調査してるけど、情報が少ないみたい。」

心なしか、フェイトの表情も少し暗いように見える。

そして、心なしか空気も重くなる。

「大丈夫。最近のミッドは平和そのものだし、それにみんなもいるね。」

流石、持ち前の包容力で空気を一挙に変えている

「そうですね。…あ、すみません、僕たち明日は早いのでそろそろ失礼しますね。」

「あ、うん。ごめんね？遅くまで話しちゃって。お休み」

「「お休みなさい。」」

2人の言葉と共に回線は閉じられた。

「……襲撃者…か…。」

あの事件から7ヶ月。

ミッドはようやく元の平穏を取り戻した。まだ復旧箇所はある。

が

「壊させはしない。」

彼女は誰にも聞こえぬ声で、誰もいない部屋でそう呟いた。

第3話 各々（後書き）

はい、第3話いかがでしたでしょうか？

Copyついでに簡単に読み流してるんですが・・・伏線をばらまきすぎな気がするのは俺だけなんだろうか・・・
そして回収しきれているのだろうか・・・
か、考えても仕方ないよね！！！！

今できることはモBag（ryの方に一刻も早く追いつくこと。
よし、がんばるぞ！

あ、読んでくれた方は、アドバイスまたは感想、誹謗中傷なんでもよいので書いてくれればうれしいです

第4話 ヒント（前書き）

みなさまこんにちわ

前話投稿から既に二ヶ月弱が経過してしまいました

楽しみにまっていたかたすみません

え？いない？そんなはずはない読んでくれるかたは万を超え
すみませんごめんなさい自覚してます読者が少ないこともw w

こほん、というわけで本日3話連続投稿いたします

というわけであとがきは6話の最後に因みに5、6話の前がきもか
きません

だつて面どu（ry

では少しでも読者皆様方の暇つぶしになれば幸いです

第4話 ヒント

第4話 ヒント：それは隠された手掛かり

「「眠い。」」

そう同時に管理局門にて発したのは、そうあの2人。
ま、主人公がたですな

どうやらあまり眠れなかった様子。ゲイルはともかく、年相応の女性がフラフラ歩くのはどうかと

【そちらの相棒、どうした？】

【いえ、少し眠れなかったようです。レンさんのほうは？】

【新しい必殺技が欲しいんだと、一晚中考えてて、眠れなかったらしい。】

そう昨日、結局レンの新必殺技の完成はせず帰宅後もああでもないこうでもないと思いを張り巡らし、考えに考えて眠れなかったのだ。

「ゲイル、なんか眠気覚まさないの？」

半開きの眼、低い声でレンは隣の寝不足ゲイルへと向く。いやいや、怖いです。

「無い事も無い。」

「やって。むしろやれ。」
機嫌悪いな！。

「怒らない？」

「うん。」

「絶対？」

「うん。」

「神に誓った」

「さっさとやれ。」

「じゃあ、遠慮無く……」

「なあ……」

「うるさい。」

「今の俺が悪いの？」

「当たり前でしょ！」

「だって怒らないって言ったじゃない」

「またぶっ飛ばされたい？（笑）」

「はははー滅相もない」

仲の良い事。

ん？何をしたか？

驚掴みとだけ

「……ゲイル。」

「んあ？」

気の無い返事をレンに返すゲイル、だがレンは次の瞬間おかしなことを口にした

「必殺技教えて。」

空気が、いや時間も止まったと思われる。

「は？」

いや、敢えてもう一度言う。
「は？」

「なんかないの？ほら、あんた剣使っじゃない」

「お前は俺と違って遠距離型だろ？中近距離の俺に言える事なんかねーよ。」

「む……」

いつも言い負かす相手に完全に言い負かされたのが悔しいのか、口を尖らせる。が、やはり正論であり反論できない。

「じゃあ高町一等空尉にでもなんか聞いたら？」

冗談まがい口走るゲイル。

が、今の彼女に冗談は通じなかった。

「それだ！都合聞いてくる！」

「え！？、おい！」

呼び止めようとするが、彼女は既に建物の中へと消えていた。
何という速さ。フェイトさんも真っ青ですね

「……たたく……。」

頭をかきながらため息。

捕まえて止めたいが、自分も仕事がある。無茶はしないだろうと、
彼も持ち場へと歩みを進めた。

その後、レンは自分の持ち場へと向かった。

本当はさっさと高町一等空尉にアポを取りにいきたかったが、仕事を
をないがしろにはできない。

結局レンが彼女のところへ行くことができたのは昼休みになってか
らだった。

レンは高町なのはのいる部屋の前に立っていた。

「……………」

何を思っているのか、扉の前でレンはたたずむ

【どうした、入らねーのか？つつ立ったままじゃ始まらないぜ？】

見るに見かねたのか、ヴェルヴェットはまるで急かすかのように話
しかけた

「ん……。そうだね。」

覚悟を決めたか、拳を握り一人で『よしっ』などといいながらゆつくりと扉へと踏み出した。

一方、その頃扉の向こう側。

「ん、お昼にしようか、レイジング・ハート」

【はい、ですがマスターご昼食の前にお客様のようです。】

なのはが相棒の言葉に返す間もなく扉が開き、その来客が彼女の部屋に入ってきた。

「こ、こんにちは、突然すみません。高町一等空尉、少しお時間よろしいですか？」

珍しくおたついている。ふむ、レンにもそんな所がある訳ね。

「ん、大丈夫だよ。えっと…レン…ヤマグチ…さんだったよね。」

笑顔を見せたのちに、こめかみに人差し指を当ててしばらく考える
と驚くことになのははレンの名前を言い出した。

「！？…私の事覚えてらっしゃったんですか…！？」

レンの驚きはかなりの物だ確かなのはから訓練生として教えを受けたことはあったが、自分のようないわば三下。

そんなやつを管理局のエースオブエースと呼ばれた大物が名前を覚えていた。

驚くのは必然というものだ。

「うん、特徴的な名前だし、自分が指導した子の名前は覚えてるよ。」

教え子なんてたくさんいるのに、この人はさぞ当たり前のような感じで言った。
流石。

「あ、ありがとうございます。」

頬を赤く染めて頭を下げる。…新鮮だ、ゲイルにも見せてやりたいですね。っていうかこの表現じゃ変な風にしか見えないのは作者だけなんですか

「あ、話があるんでしょう?」

文字通りわたたと緊張しているレンをまるで誘導するかのように話の腰を元に戻す。

「あ、はい、えっと…、高町一等空尉に少しご相談がありました…」

「なのはでいいよ。」

かなりテンパってらっしゃるレンになのはは笑いかける。沢山の教え子がいたのだから、こういうのは慣れているのだらう。

「と、とんでもないです。私みたいな新人が…」

絵で描いたような緊張のしかたをしているレン、本気で自分とは次

元の違う相手だと思っっているが故の反応なのだろうか。一線を退くどころか、二線、三線と退いている。

「いいよ。少し前に教えた子たちもそう読んでたし、高町一等空尉じゃ、呼びづらいみたいだから。」

流石、戦技教導官。扱いに慣れてらっしゃる。

あれ？さっきから誉めてばっかしじゃね？

「じゃあ…なのはさん。」

「はい。なあに？」

改めて仕切りなおしなのか、おずおずと完全に恐縮しているレンに向かつてやさしく返すなのは。

「私、相棒の脚を引つ張らないようにもつと強くなりたいんです。それで私なりにどうしたらいいか考えたんです。でもどうしたらいいか分からなくて、それでゲイ…相棒に聞いたらなのはさんに聞けばと言ったので…。」

自身の中でスイッチが入ったのか、先ほどまでの恐縮した気配が消えて、レンの瞳にしっかりと力が宿る。なのはにもそれが伝わったのか、やさしい先輩から教導官の顔へと切り替わった。

「レンさんは確か…。」

「レンでいいです。私の方が年下ですし。」

さきほどのおずおずとした口調はどこに消えたか、語尾がはっきり

としている。こういうあたりがレンらしい。

因みに、レンは18

描き始め当時の作者とタメですね。

「ん、わかった。

…レンは確か、遠距離レンジだよね。」

「はい、なのはさんと同じ長距離砲撃が主流です。ですから、なのはさんが良いなら、暇な時に詳しい話を聞きたいなと思って…。」

「わかった。それじゃ、空いた日ができたら連絡するね。」

交渉成立。なのはは自身のデバイスに一言かけると、スケジュールにレンとの約束に関することを入れてくれた

「はい。ありがとうございます！では、失礼します。」

なのはと会話をし始めてから、レンは初めて笑みを見せ、ぺこりと頭を下げると部屋から出て行った。

「レン・ヤマグチ…相棒って事はあの人だね。」

そんなことを呟いて彼女は予定より少し遅めの昼食を開始した。

「へっくしー！」

くしゃみをしたのはもちろんこいつ

我らが主人公（笑）ゲイル。

「参ったな…。あの日が来るまでなるべく体力は残したいんだけど」
ズルズルと鼻をならしながら指で鼻の頭をこすり呟くと同時に大きなため息を吐き出す。

「あの日ってなに？」

突如後ろから聞こえてきた自身の相棒の言葉に思わずゲイルはビクリと体を震わした。

「お前、心臓に悪いな本当に・・・」

「う、うるさいなあ、で、あの日ってなんなの？誰かと約束でもしてるの？」

少しは悪いと反省の気持ちがあるのか少し頬を赤く染めながら口をとがらせて反論するも、話の軸はずらさない。

「何でもねーよ。で、居たの？」

「?…」

う、うん。予定が空いたら連絡くれるみたい。」

若干げんそうな顔をするが、しばらく相棒をやっているのは伊達ではない。こういうときは彼は何も話してはくれないのだ。

「へー、良かったじゃないか。まあ、盗めるだけ盗んで来いよ。」

随分と語弊があるが、しっかりおそわれといたいんだろう

「ん、了解。あ、そういえば、最近暇？」

「んあ？なんで？」

ゲイルの言葉が素直にうれしかったのか、やわらかい笑みを浮かべたまま返事をすると思い出したかのように首をかしげた

「質問を質問で返すな。」

「悪い。で、なんかあんの？」

さきほどの天使のような純粋な笑みはどこに消えたか、レンはいつもどおりのゲイルをぶち殴るレンに戻った口調で叩き返す。

「いつになるか分からないけど、知り合いがご飯食べに行かない？
って言われて、ほら、どうせゲイル友達いないじゃない。この際、
作らせようかなって。」

友達いない…

なんか切ない響き…。

「ん。ああ…いいね　　…悪い、今週はパス。」

ゲイルとしても全くもってして悪い面がないためか、気のない返事ではあるが、承諾しかけたその矢先に表情を消してその申し出をキャンセルした。

「む、なんかあるの？」

「忙しいだけだって、特に夜はね。なんか最近残業多いんだよ。」

嫌われてんのかな…俺。」

なーんて、とか言いながらケタケタごまかすように乾いた笑い声で笑うゲイル。

「ふーん…じゃあ来週なら大丈夫なの？」

「おう。多分大丈夫…お。時間やべ…じゃ俺行くから。」

思い出したように袖をめくり腕時計を確認すると、時間が無いのか少し焦り気味にゲイルは走り出した。

「うん。空けといてよー」

分かってるーなどと去り際に言いながら角を曲がり消えるゲイル

……………恋人か！

「ふー…今日も疲れたー」

現在帰路に至るところのレン。大きく両腕を空に伸ばしながら背骨を伸ばす。

そこで

【おい、メール。】

ヴェルヴェット・ムーンがメールの通知をレンに伝えた。

「はいはい…差出人…高町なのは…
…………どうやって知ったんだろう…
えっと…」

首をかしげながら謎の情報網だと、かつてに考えながらレンはメールボックスの新作メールからなのはからのメールを読み上げた

メールの内容は次の通りだった。

『突然ごめんね。』

直接言おうと思ったんだけど、メールのが早いと思ってレンのデバイスの事を調べてメール送ったんだ。

で、お昼の話だけ。

次の休日の×日に休みが取れたから、話はその日で大丈夫かな？駄目なら他の日を用意するよ。

連絡待ってます。』

レンは読み終えるや否や、早速メールの返信をした。

内容は以下

『大丈夫です。その日は私も休みなので空けておきます。』

通り

因みにその日、あの血の繋がらぬ親子の約束日でもある。

偶然です。

意図なんかありません。

適当です。

【で、お前は何を聞くんもりなんだ？】

メールボックスを閉じるレンに向かってヴェルヴェットはなぜか不思議そうに問いただした。

「そうだなあ…とりあえず、あんたを剣にする事は聞きたい」

【なるほど…ね。】

未だ良い顔をしてはいないのか、若干歯切れの悪い言葉でデバイスは言葉を返した。

「うん。あの人も昔は運動が苦手だったって聞いた事あるし、何かヒントでも得られたらな…って」

【ま、好きにしてくれ。】

まるでどうでもいいかのように切り捨てる言葉をデバイスはつぶやいた、マスターのことが心配でないのだろうか。

「あんたに言われなくてもわかってる。あ、なのはさんのアドレス登録しといてね」

なぜか、口元を緩めて笑顔をデバイスに向けながらいつもの胸ポケットにしまいつつ、ついでといわんばかりに言葉を付け加える。

【あいよ。】

そんなこんなで、デバイスとつまらない雑談をしながらもゆっくり帰路へと至るレンであった

月が照らす。

時はもうすぐ夜更けとなる。

今宵の月は三日月。

一人の男が窓から月を見上げる。

顔はよく見えない。

誰だろう

「半月まで…後…どのくらいだっけな…」

そんな事を月を見上げながら男は呟く。

日付が変わろうとする。

刻々と

時間だけがその場で前進する。

夜はどんどん更けていった。

第5話 崩壊

第5話 崩壊：平和は静かに破られた

朝

一人の女性が目覚める

「ん……。」

顔全体に酷い火傷の痕、口と鼻の間に走る刀でつけられたような文字の傷。

マリ。女性というよりは少女、という印象が強い

女性にしては質素なベッド。

それもその筈。

持ち主はエステイだからだ。

彼女はゆっくりと起き上がる。そこにベッドの持ち主の姿はいない。

彼は、別室のソファーに寝ているからだ。

別に添い寝とかそんな色っぽい展開はありません

マリはゆっくりと立ち上がり。彼の寝るソファーに

そこに彼の姿は無い。

「起きてるんだ……」

時刻は日が昇る少し前。

彼女も早いがエステイはもっと早い。

呟いたマリはテーブルにある書き置きに気がつく。

『少し早く目が覚めた。

少し準備運動に出掛ける。』

綺麗な字ではあるが淡白な調子で書かれていた。

マリは書き置きを読むと、着替えを済ませ簡単な朝食をこしらえると出口にかけてある、仮面を手に取り顔につける。

パタパタと女性らしい足音をたてながらエステイがいるであろう場所へと向かっていった。

「……………」

場所はミッドから少し離れた所にある森。

森の中にある小さな広場がある

そこにエステイはいた

木を突き立て手に持つデバイス

名はエインルジ

一振りの剣だ。

青を基調とした色を持つ柄、刃は銀色。

エインルジを持つエステイ。

瞳を閉じて静かに佇んでいる。

精神を集中しているのか…

静寂を断ち切るように瞳をカッと見開き、その瞬間、彼は消えた。

いや、それは間違い、消えたように見えただけだ。

あまりのスピードにそう見えただけ。

突き立てられた木はみるみるうちに剣に斬りつけられズタズタになっていく。

「はっ」

裂迫の気合いと共に。

ズタズタとなった突き立てられた木に留めの一撃。何者も生存を許さないとでも言うような絶対的な留めの一撃。

木は、粉々に砕けた。

「……………」

その様子に先日、シグナムとの戦いでの油断や慢心は一切感じられない。

「エステイ。」

「ん…？」

聞きなれた誰かの声でエステイは戦いの最中においていた意識を元に戻した。

「お疲れ様。」

手に飲み物を持つマリがそこにいた。
仮面をつけているが、笑いかけているのがわかるほど口調はおだやかだった。

「こんな所でもつけるのか？」

「エステイ達以外には見られたくないから……」

仮面を外さずマリはまるで、悪くもないのに「ごめんなさい」と謝っているかのように呟く。
当然エステイにそんな責めるつもりなど微塵も無い。

エステイは気まずそうに視線を逸らす。

お互いおかしな無言が続く。

「そ、それにしても速いね、私には絶対出せないよ、あんなスピード。」

「いや、そんな必要はない。お前は僕らの援護役なんだ、後ろから助けてくれれば、それでいい。」

先ほどの気まずそうな雰囲気但至少でも無くそうと、なるだけ平静を装う。

マリも笑顔でそれに答える。

「うん、ありがとう。」

「朝からお熱いわねえ」

彼らの背後から突如声が響く。

その先には以前作戦会議の際にいた、色ぼけ…もとい、派手な格好をしていた女が世間一般的でいうパジャマ、ネグリジェとかそんなものを着たままクスクスと笑いながら立っていた。

マリは彼女の台詞に頬を赤らめ…って仮面で見えないか。

「ち、ち、違うよカレン！ちよ、ちよつと差し入れに來ただけ！」

と、手をぶんぶん振り回してあからさまな反応。仮面を付けてそれをやるのか…。

まあ、初々しい、ありがとうございます。

「お前が朝早いとは、珍しいな。」

横でおたつくマリとは対照的に随分冷静なエステイ

「たまにはあるのお。ヴォルド君何回揺り起こしても相手してくれないんだもん。」

唇を尖らせながらあのガウンを着ていたグラサン男。ヴォルド君とやらに関する愚痴を零す。

「お熱いのはそつちでしょ。」

楽しそうだ。

彼らにはこの幸せで十分かもしれない。

「マリ、先に帰る。」

「あ、うん。ご飯できてるから先に食べてて。」

エステイは一足先に凄い速さでその場を去る。

「ご飯作ったのお？」

仲良いわねえ、羨ましいわあ〜」

からかうようにマリの両肩に手をおいて揉みながらニヤニヤ笑いカレンは茶化す。

「もう…！うるさいなあ、カレン。もう知らない！」

ぶいっと後ろをむくと拗ねてしまったのかマリはカレンを残し、走って行ってしまった。

「ホント、羨ましい…。」

そう、表情に笑みの消えたそんな彼女の寂しげな呟きも

多分聞こえていない。

【この、ドジが。】

「う、うるさい。もう私のバカ！」

バタバタと慌ただしく部屋を駆け回るのはレン。

今日は休日、彼女は寝坊した。

いつもの休日なら彼女は布団の中だ。

が、今日は違う。

【自分で上司呼び出して遅刻とか、マジ間抜け。】

「はいはい、どーせ私は間抜けですよ。」

寝癖で跳ねた髪の毛を猛烈な勢いで直しながらデバイスの皮肉に軽く流す。

「時間は？」

【流石だなあ姉弟。^{きょうだい} まだ十分ちよつとはあるぜ】

「当然！自分から呼んで遅れるもんか。」

最早、起きてから神業とも言える速さで着替えから寝癖修正までもの数分。

お前、遅刻なれしてるだろ。

ばきっ

「ふう、なんか当たったけど…気のせいかな。よし、ご飯食べてこよ。」

あの女…わざとだ…絶対わざとだ…。

レンは朝食を適当に終わると簡単な荷物とデバイス片手に出掛けたのだった。

「フェイトさん」

「こんにちは」

駅の前の待ち合わせ場所にて立つフェイトに声をかけるのは赤髪の少年、ピンクの髪の少女
言われずともエリオとキャラですね、はい。

「エリオ、キャラ、二人だけで大丈夫だった？
変な人とかに絡まれたり…」

「もう、大丈夫ですよ。キャラと二人ですし、昨日も心配要りませんでしたって言ったじゃないですか。」

相変わらずの彼女の過保護っぷりにキャラもエリオも苦笑を浮かべ、
フェイトは少しを頬を赤らめる。

血がつながらなくとも絆はある。絆は要る

どれだけ凄惨な過去があっても、どれだけ魔導師としての能力が高くても、彼らはまだ10。

親代わりは必要。

フェイトの存在の大きさが分かる。

かたやフェイトも19

一皮剥けば彼女も10代の女の子。
いくら物腰がついていてもそれは変わらない。
彼女はよくやっている。

話が逸れたな

閑話休題

「じゃあ、エリオ、キャラ行こうか。荷物私の部屋に置いてこよ。」

二人の手を掴む。

真ん中にフェイト。

両サイドにエリオ、キャラと言った絵面だ。

時刻はまだ午前。

平和な休日。

そう、平和な、ある日の一日だ。

「こんにちは、レン。」

「なのはさん、こんにちは。」

ここは管理局

練習場

模擬戦などが行える場所である。

へ？休日？

そうですよ。彼女らは仕事をしに来た訳ではない。

「すみません、大切な休日を頂いちゃって」

彼女が若くして一児の母である事をレンは知っている。そのためか、かなり申し訳なさげだ。

「いいよ、気にしないで。で、相談があるんでしょ？」

近くにあった休憩のために用いられる手頃なベンチにお互い座る。

「はい、この前話した通り私はロングレンジなんですけど、やっぱりそれだけじゃ足りないのかなって思うようになってしまっ…」

「何か考えがあるの？」

先ほどから雰囲気は一転、あの時と同じように心優しい先輩から戦技教導官の面もちになる

「ヴェル…デバイスには反対されたんですけど、近接にも応対できるように、剣を追加したいって考え考えてるんです。」

「それで私の意見が聞きたい
って事だね？」

相手が言いたいことを簡潔にまとめて、納得したようにうなずくのは

「はい、…後もう一つ理由がありまして…」

「？」

レンは言つべきか言わぬべきか、迷つた拳げ句。
意を決し、気恥ずかしげにこう続けた。

「私、昔から剣とか槍とかが大好きで…そういうのへの…なんていうんでしょうか…憧れ…みたいな物もあつて。」

なのは目をぱちくりさせると、少し困つたように首を傾ける。

「うーん、難しいなあ。」

「？」

困っているためか珍しく苦い顔をしたまま首をかしげてこめかみに指を添えて考えている。

「レンの考えだけなら、なんとも言えるんだけど」

「……………」

黙りこんで聞き耳を立てるレンになのはは続ける。

「レンのそういう理想とかそういうのも全否定できないんだよ。
私もレイジング・ハートと出会った時も自分の魔法使いの理想像を
バリアジャケットにしたしね。」

「じゃ、じゃあ、私が魔導師としてそういう方針を考えてるって事
にはどう思ってますか？」

レンの言葉になのはの表情は僅かに曇る

「正直、よくは思っていないかな。」

レンの気持ち、良く分かるし大事な事だと思うよ、でもね」

「でも…なんですか？」

少し間が空く、言っただけの良いものか悪いものかと自身の中で考えているのか、少し相手から視線をはずすところ答えた。

「それってレンのパートナーを信頼してないって事にならないかな？」

「！」

予想外すぎる先輩の一言。もちろんレンにそんな意はない。むしろ信頼しているからこそその考えでもある。

「確か、レンのパートナーはクロスレンジが主だね
近接格闘への応対…それって、その人の力を信用してないって事に繋がると思う。」

「……………」

的を完全に射ている発想、達観した者ならではの発想でもある。レンは黙ってしまった・・・いや、「何も言い返せないでいる」が正しい。

「それに」

「？」

「元々ロングレンジの人間がクロスレンジの技を覚えるのは難しいよ。レンがロングレンジになってるのは、レンに合ってるって事なんだし。」

戦技教導官

たくさんの新人を育ててきたなのは意見はどれも筋が通ってる。その手厳しい指摘にレンは少し気を落とす。

「そう…ですね。」

ありがとうございます。なのはさん、私、もう少しで何かを亡くすところでした…」

顔を伏せる。

「でもね、レン。そういう気持ちは大切だと思うよ。その気持ち忘れちゃ駄目だよ。」

「…はい。」

少しの沈黙の後、顔を上げて強い表情で言い切る。
うん、もう、大丈夫だろう。

「ありがとうございました。また、一から考え直してみます。」

レンは立ち上がり、深々と頭を下げる。

「あ、待って。ちょっと思いついちゃった。」

頭を下げて帰ろうとしたレンをなのはが突如呼び止める。

「え？」

「うん、これならレンの理想も壊さないし、パートナーも裏切らないよ。」

「それってどういうことですか？」

「

場所変わり、ここミッドの街にあるレストラン。
フェイト、エリオ、キャラが食事に来ている。

「あの、襲撃者の話…何か進展ありましたか？」

注文を待つ、エリオはフェイトに尋ねる
なにやら真剣なお話中のようです。

「あれから進展はないよ。目撃情報もないし、もしかしたら諦めて
静かに暮らしてくれたのかもしれないね。」

はははと苦笑いを浮かべ有り得ない事を願望のように言う。

「そうだと良いですね…もう誰かが無意味に傷つくのは嫌です。」

キャラが寂しく呟く。

JS事件・・・

たくさんの人が傷ついた。体にも心にも

「ご飯食べたらどうしようか？」

暗くなった二人に笑顔を浮かべ問い掛ける。

せつかくの休日。思い切り遊ばなくてはもったいない。

「え…？えつと…」

見事なシンクロ。

それと同時に

ドーン！！！！

！？

突如起きた爆発音。

音源はレストラン向かいのビルの一室。

「事故！？」

キャラが立ち上がる。いや、事故はおかしい。

この辺りにそんな爆発を起こすような物を取り扱う建物などない。

フェイトは窓の外を確認する。

「！？」

爆煙から、一瞬だが、人が飛び出した気がした。

「エリオ、キャラ。一般の人をお願い。」

「え？フェイトさん！？」

エリオが呼び止めるが、彼女は既に店から飛び出し、バリアジャケットに身を包み、宙に駆けていた。

S I D E E T H T Y

「……………」

僕は、建物の屋上から眼下に広がるパニックを見据える。

「もう、後戻りはできない」

誰に言うでも無く、僕は呟く。

エステイ・ドライの復讐劇が始まった。

本当は怖い。僕のエゴで僕と同じように大切な人を亡くす人が出るかも知れない。

そうすれば、次に狙われるのは僕だ。

頭では分かっている。

いけない事だと、馬鹿げた自己満足だ
だが心が止まらない。止められない。

僕はデバイスを握る手が震えるのを感じた。

「父さん…。」

見てくれとは言わない。

叱らないでくれとは言わない。

僕はあいつらが許せない。

そう思うと震えは止まった。

全く、性根がねじ曲がってる。

「!？」

向かいのレストランから、綺麗な金髪をストレートに伸ばした女性が真っ直ぐこちらを見据えている。

彼女は

バリアジャケットを纏い

真っ直ぐこちらに飛んで来た。

「管理局です。この爆発はあなたの仕業ですか？」

ストレートの髪をツインテールへと束ねた姿で

管理局と名乗る女性は

デバイスを構えて

僕を真っ直ぐに睨みつけ
凜とした表情で問い掛けた。

手の震えが蘇る。

覚悟を決めるエスティ・ドライ

お前はもう、戻れない。

第6話 激突

第6話 激突：交じり合うは二つの閃光

フェイトは、閃光が向かった屋上へと急いだ。

その先には予想通り、何者かが立っていた。

「管理局です。この爆発はあなたの仕業ですか？」

真っ直ぐ見据え、問いかける。

顔に仮面をつけ、表情が全く読めない。

こちらの問いかけにも

応じてはくれない。

「重要参考人として一諸に来てもらいます。武装の解除を

」

「断る。お得意の力で制圧してみたらどうだ？」

フェイトの言葉を遮り、仮面の男は双剣を広げるように構え腰を落とす。

「……………」

大人しく武装解除するとは思わなかったが、やはり戦いには持ち込みたくはなかった。

そう考えながら、彼女は金色の刃を形成した自身の愛機【バルディッシュ・アサルト】を構える。

「「っ！」」

二人の魔導師は一気に弾けた。

その速さは弾丸のごとく。

常人には彼らを視認することすら難しいだろう。
それもその筈、なんせ双方の得意分野は

速さなのだから

エステイの青い凍てつく閃光と
フェイトの金のほとばしる閃光。

「おおおおお！」

「はあああああ！」

二人の烈迫した気合いと共に斬撃が撃ち合われる度に辺りに衝撃を放つ。

速い…

エステイは思う。

表情こそ落ちつついている。

だが彼の心は沸点を超えるほど煮えたぎる
自身の理性を燃やしながら。

必死に憎しみを抑える。

冷静を欠いた瞬間

相手の刃に叩きのめされる

それほどまでに両者は拮抗していた

強い…

フェイトもまた内心呟く。

自身の斬撃に的確に反応してくる。

そして返しの斬撃はどれも無視できない重みを持つ。女の自分には出せない力強さ。

だが、勝てない強さではない。

いける

風を切り、身を翻す両者全く同時に思考し、全く同時にに個々の刃を撃つ。

ガァン！！！！

女とは思えない戦いぶり

仮面の裏からも感じられる剥き出しの敵意

っ…油断はできない

両者の思考は同時に巡る

こいつ…

この人…

まだ自分の魔法を使ってない

再び両者は弾ける。

閃光同士のぶつかり合い。

ぶつかってはすれ違い、ぶつかってはすれ違う。

そして、青い閃光が徐々にスピードを上げる。フェイトの刃が遅れる。

コンマ何秒の世界で遅れを取り始める。

僅かにフェイトの刃が遅れ、二刀の短剣と一刀の大剣が鏖戦り合う。

「どうした、管理局。僅かに遅れているぞ？」

刃を交えて仮面の奥の声がせせら笑う。

「っ……………」

フェイトは刃からこちらに僅かにかかる重圧を感じる。

つまり、競り負けている。

当たり前だ。腕が立つと言っても彼女は19歳の女性、屈強な体を持つ訳でもない。

同年代程度であろう男に力で退けを取るのは当たり前なのだ。

「消える」

憎しみが僅かに籠もったその声。

フェイトにかかる重圧は一気に増し、彼女は鏢競り合いに負け体を大きくよろけさせる。

ダンッ

仮面の男が踏み込む。

凶刃を標的に刻み込まんと、だが

「!？」

顔にかかる仮面がこぼれ落ちそうになる。

男は反射的にそれを押さえる。

フェイトが行動を起こすには十分な隙であった。

「っ……。」

左手を突き出す。

男に向かってバインドをかける気だ。

「抵抗を止めて !？」

ください。と言葉を紡ごうとしたその瞬間、彼女は目を見開き驚愕した。

自身のかけたバインドが相手の体にかかった瞬間霧散したのだ。

「バーフタング」

「!？」

男が呟く。フェイトの体にバインドがかかる。
そして、バインドはフェイトの体を凍らせ始めた。

「凍結…!？」

フェイトは腕と体を完全に凍結させられる。

「僕的能力 チカラ の情報を持ち帰らせる訳にはいかん。」

フェイトは迫る相手を前に必死で氷のバインドにもがく。

「無駄だ。物理的な縛りと魔力での縛り。そう易々とは外れん。」

フェイトの前で刃を振り上げる。

「終わりだ。」

「ッ……………」

恐らくこの刃には非殺傷性は無い。
つまり自分は死ぬ。

この一瞬で彼女は覚悟した。

エリオ…キャラ…はやて…なのは…！

「じゃあな。」

男の刃が下ろされ、彼女の命を摘む瞬間

とてつもなくでかい魔力が、彼らの感応を刺激した。

「！？」

「だあああああ！！！！」

突如現れた男が仮面の男に斬りかかる。
仮面の男はシールドで男の剣を防ぐ。

「っ…新手か…！」

仮面の男は後ろに飛び退く。

フェイトの前に立ちはだかるように眼鏡をかけたその男は武器を向ける。

ゲイル・マリオネットその人だった。

時が遡る。

ここ、ゲイル邸

ゲイルは冷蔵庫の前に立ち尽くす。

「……………」

中身が絶望的なのだ。
卵だけってお前…。

「なんてこった…野菜のストックがねえ…」

いや、野菜どころじゃねーよ。

「卵だけって…お前…。」

いや、お前…、じゃなくて、俺…、だろ。

「日が暮れねーうちに行ってくつかな。」

時刻はちょうど昼前。

「サクッと済ませて寝よう。」

この暇人が。

まあ、こちらが言えた義理ではないが
そしてゲイルは財布をポケットに突っ込み、デバイスを持つとゆっ
くり家を後にした

買い物を終えて、重たい買い物袋を両手に引っさげ帰宅途中のゲイル
「腹減った…。」

完全にお昼を過ぎてしまった。
思いの外時間がかかってしまった。
買いためるのがゲイルのスタイル。そのため、何を買うのか十分
考えるのだ。いつもなら前日とかにゆっくり考えるのだが、今回は
急いで出たために、その場で考えたのだ。

「さつさと帰…ん…？」

人だかりができている。ゲイルはその人だかりに近寄り

「すみません、管理局の者です。何かあつたんですか？」

持ち歩いていた自身の身分証明書を見せ、野次馬の一人に話しかける

「ああ、突然建物から爆発が起きたんだよ。」

ゲイルはありがとうございますと一礼すると、建物の前に行った。
すると

「一般の方は危ないですから離れて下さい。」

ピンク色の髪の少女に止められてしまった。

「俺も管理局の人間だ。状況は？」

「え…？あ！はい、怪我人は今の所いません。」

一瞬、？を浮かべるがすぐにピンク色の髪の少女はゲイルの質問にすぐに答える。

そりゃ両手に買い物袋持った奴が管理局の人間なんて思わないよな。

「分かった。じゃあ俺は建物の中に人がいないか見てくる。」

「あ。フェ…ハラウン執務官が、既に行ってますが、戻って来ないんです。私たちは一般人の誘導をしていますから、見てきてくれませんか。」

「！…分かった。」

ハラウン執務官と聞き、ゲイルは急いで買い物袋を安全な建物の陰に隠し、バリアジャケットを身にまとい飛び立つ。

【まずは、爆発が起きたフロアから…ん？】

屋上の方から僅かだが音が聞こえる。

【戦闘？】

その瞬間、音が止む。

【不味い…！】

音が止んだという事は、戦闘が終わった、もしくは終局に入った、という事。
恐らく後者。

ゲイルは速度を上げ屋上にたどり着く。

「!？」

綺麗な金髪をツインテールにした女性が、今正に仮面の男にやられようとしている。

「月交 サテライト！」

【マ、マスター！？アレを張らねば管理局にばれ……】

デバイスの忠告も無視し

「接続 リンク ……!!」

ゲイルは自身の力を強制解放した。

爆発的な魔力ででたらめなスピードをひねり出し、目標へと疾走する（はしる）。

「だあらああああ!!!!」

回想終了

「大丈夫っすか？」

ゲイルは相手に背を向けたまま相手に言う。

「あ、はい…ありがとうございます…。」

フェイトはおずおずと口を開く。

【さて…割り込んだ方がいいがハラOWN執務官とやり合える奴に、俺が通用するかどうか…】

固い表情のままゲイルは仮面の男を睨む。

「増援か…、数が増えると面倒だ。ここは退く。」

仮面の男はゲイルと数秒視線を交えると

そのまま視認できぬ速さで逃げていった。

「待つ……………」

既に敵は遙かかなた。
逃げられた。

「すみません、逃げられました。」

ゲイルはフェイトに視線を移す。

フェイトは氷のバインドを解除し、ゲイルに笑顔を向け

「ありがとうございます。助かりました。」

「いえ、間に合って良かったです。」

やっぱり、覚えてねーか。こんな会い方しなくなかったな。

ゲイルが勝手な呟きを内心でして、フェイトを見つめていると

「?... なにか...?」

フェイトが不思議そうに首を傾げる。

「いや、なんでもないっす。それより下で二人が心配してますよ。」

「あ、そうだった。」

「行きましょう。」

二人は屋上からゆっくり地面に降りていった。

「「フェイトさん!」」

あの二人が駆け寄る。

恐らく知り合いだろう。

ゲイルは三人の姿を見て何故か、安心する。が

「あ！袋！」

バリアジャケットも解かずにゲイルは自身が買い物袋を置いた場所へ
てか、解除しろよ。

「ふー…良かったー…」

アニメとかなら、ここで「アッー」ってなって話が展開するだろうがそうは行きません。

ゲイルが買い物袋を持って現場に戻ると、局員が数人駆けつけていた。

恐らく、誰かが通報したのだろう。

「犯人と思われる人物には逃げられました。」

フェイトが局員と受け答えをしている。

「普段はストレートなのか」

バリアジャケットを解除したゲイルは
普段のフェイトを見て呟いた。

「あの…。」

不意に声が聞こえた。

「ん？」

振り向けば、先ほどの少女と、少女と一緒に一般人の誘導をしていた二人がいた。

「どうした？」

ゲイルが首を傾げる。すると彼らはぺこりと頭を下げる。

「フェイトさんを助けてくれて」

「ありがとうございます」

「よ、よしてくれよ。俺は味方を助けただけさ。」

ゲイルは二人の真剣なお礼に少し照れながら、二人に言う。
だが

「いえ、フェイトさんにもしもの事があつたら……って考えると」

「とにかく、私たちの大切な人なんです。ありがとうございます。」

「……ああ。どういたしまして。」

そうか、こいつらも居るのか。自身を救ってくれた大切な何か。
俺にとっての……レンか……。

そんな事を考えながら、彼は口許に笑み浮かべ、今度はしっかりと
彼らのお礼に応えた。

「そういえば、名乗ってなかったな。俺はゲイル・マリオネット、二等陸士だ。よろしく。」

「僕はエリオ・モンディアル、二等陸士です。」
「私はキャロ・ル・ルシエ、エリオ君と同じ二等陸士です。」

よろしくお願いします。と言う彼らを前にゲイルはポカンとしていた。

二等陸士……………？

彼らは自身らを二等陸士と言った

待て、落ち着け

大丈夫だ。三等、二等、数字は俺のが上……
あれ……？でも階級は下じゃね……？

落ち着け、素数を数えろ

1、3、5……しまった、1は素数じゃない。

とりあえず、落ち着け。この馬鹿野郎

そんな混乱をするゲイルを前に2人のいたいけな少年らは首を傾げた。

大丈夫、このお兄さん、ちょっとイタイだけだから。

「あゝなんつつか、サーセン。」

漸く我に帰ったゲイルは二人の少年らに頭を下げた。

「三等陸士ふぜーがちょーしこきました。サーセン。いやすいません。」

ダメだこいつ。

「き、気にしないでください。ゲイルさん、僕たちより年上ですし、気にしませんよ！」

「そ、そうですよ！、むしろ私たちの恩人の恩人……アレ……？……えつと……」

エリオに続くキャラも何か言っているが、途中から自身の言葉を見失っている。

「あ、いやそれでも　!？」

言葉を不自然に切るゲイル。

「?…どうか…しましたか？」
エリオの質問にも答えず、彼は誰にも見えない物陰に全力で走っていった。

「が　は　っ」

建物の陰。
ゲイルは、結構な量の血を

吐血した。

【強制解放の…リバウンド…ですね…】

「にげえ…」

口に広がる鉄の味を吐き捨てる。

口許の血を手の甲で拭い。

「悪い、ちょっと急にトイレに行きたくなってさ…。」

エリオ達の元に戻った。

「は、はあ…。」

トイレにしては随分とおかしな態度だった。

「じゃあ、俺帰るわ。報告はハラOWN執務官がしただろうし、じやあな、エリオ、キャロ」

買い物袋を両手に抱えて、ゲイルは足早に去り人だかりに消えた。

「……キャロ。見た？」

「うん、手の甲、血がついてた。」

ゲイル。ガキだと思って甘く見てたな。

「はあ…はあ…。」

「レン、やったね。できたじゃない。」

白を基調としたバリアジャケット、黒を基調としたロープのバリアジャケットが浮かんでいる。

黒いほう…つまりレンは息をきらせ、肩で呼吸している。

だが、その顔は明るい。

対して白いほう……つまりなのは息こそ全く上がってはないが、嬉しそうに笑っている。

「で、できた……。」

「うん、後はレンがそれを形にするだけだよ。」

一体何を話してるのでしょうか。作者にもわかりません。なんて事は無いです。

「なのはさん、ありがとうございます。」

「うん、どういたしまして。」

汗を光らせるレンは笑顔でなのはに礼を言う。
なのはも笑顔で答える。

「これで」

ゲイルをサポートできる。

なんだかそんな気がレンの中で渦巻いた。
新技を一つ作っただけなのに

だが、そんなたった一つでも
きっかけがあれば
大きくなる。

「わっ……と……」

突然よろけてしまうレン。

一時間ぶつ通しだったのだ、無理も無い。

そもそも彼女はなのはのように魔力値が高い訳ではない。

「もう、無理は駄目だよ。」

よろけるレンをなのはが少し不機嫌そうに覗き込みながら支える。

「す、すみません……。」

なのはの体に支えられながら地面に着地する。

「もう大丈夫です、一人で歩け……」

そう言いながら足元は覚束ない。

ちょ……可愛いぞレン。

「全然大丈夫じゃないよ。無理は……絶対、駄目」

「っ……………」

その言葉の重みに言葉を失うレン。

レンは知っているからだ。彼女の過去の事件を、彼女の唯一とも言える落ち度を。

「すみません……気をつけます。」

様々な意を込め、彼女は謝罪した。

「うん、わかればいいよ。」

わかればいい。どのような意をとったかわからないが、それ以上は言わなかった。

「じゃあ、あのもう少しの間支えお願いします…なのはさん。」

「うん、お安い御用だよ。」

レンとなのはお互い笑いながら、歩みを進めた。

「失礼します。」

何やら暗い部屋。一人の局員が部屋に入ってくる。

「なんだ。」

奥に座る男は背を向けたまま応える。

「サテライト・システムの反応が確認されました。」

【サテライト・システム】

その言葉に反応する奥の偉そうなおっさん。いや、暗くて見えませんが多分そうでしょう。

「やはり生きていたか、ゲイル。」

彼の者の名を呟く。

年こそ違ったが、その顔はゲイルと同じ物だった…。

月が出ている。

今宵は半月だ。

「半月…。」

男は呟く。

その体は微かに震えているようにも見えた。

「大丈夫だ…いつも通り。やれば…いい…。」

相変わらず顔には陰が差しており見る事はできない。

夜はどんどん更けてゆく

第6話 激突（後書き）

ふう、なんとか今回の分は終了です。いかがでしたでしょうか

特盛3話連続投稿

なんかちよつと楽しかったり・・・すみません調子に乗りました次からは定期的にupしますだからそのエクスカリバーやら干将・莫耶なりなんなり出すのはやめてくださいごめんなさい。

あ、今のでお分かりになった方もいらっしゃると思いますが、自分無類のf a t e好きです。今は月姫をプレイ中です。

と、まあこの話は又今度にも
それでは皆様次回もお楽しみに！！

第7話 繋がり（前書き）

こんばんは、前回からだいたい二週間弱でしょうか？

コピペを開始いたしますです。

現在PCにPS2をつなげながらコピペ中です。

まあそんなことはどうでもいいですね。

ごたくはいいからゆっくりしていつてね！！！

第7話 繋がり

第7話 繋がり：人が必ず欲す物

S I D E E T H T Y

「……………」

僕は部屋の中、一人で震えいた。

真っ暗な部屋、その片隅で座り込み片手で頭を押さえ、カタカタと

「父さん……………」

理由はあの金髪の女だ。

彼女は強かった。実力こそ伯仲だったが、心の強さはガラスのように脆弱な僕とは比べ物にはならない。

彼女は僕が刃を振り上げ、殺す寸前でも震える事無く仮面越しの僕の瞳を真っ直ぐ見据えていた。

僕には何故か、彼女の姿が、目にしていない父さんの死に際の姿と重なった。つまり父さんに見えてしまった。

僕は刃を止めてしまっていた。

恐らく、例え邪魔が入らずとも彼女を殺さなかったろう。僕には、あんな目をした彼女を斬り捨てる事は

できない

震えが止まらない。

…情けない。あんな姿を見ただけで、弱い僕は戦うのが怖くなった。

僕は、応えない。

「怖い？」

「……………」

震えが止まらない。

「今なら、まだ戻るよ。」

「戻れない。」

「戻るよ、だってエステはまだ誰も殺してない。エステが戻りたいなら、みんなで静かに暮らそう？」

彼女は僕を見据えて静かに言った。

「戻れない。」

僕は強く、返した。

「震えてるじゃない。」

「違う。」

「エステって弱いんだね。」

「弱さ、力がついた。でも心は…脆いままだ。」

震えが止まらない。

その時、柔らかい感覚が僕を包んだ。

「じゃあその震え、私に頂戴？二人で背負おう？」

マリは僕を抱きしめていた。

「私たち共犯者じゃない。カレンも、ヴォルト君もいる。一人じゃないよ？」

体の震えは消えていった。

徐々に、徐々に。

共犯者。多分、その言葉に安心したんだ。

悪いのは僕だけじゃない。
きっと、そう感じた。

だから、震えが消えたんだ。

全く…性根がねじ曲がってる。

場所はフェイトの自宅。

時刻は、朝。

テーブルに座るは、金髪の女性と、赤髪の少年、桃髪の少女がいる
つまり奴らだ。

「ご、ごめんね？せつかく来てくれたのに…。」

あの後、報告やらなんやで結局何もできずに漸く解放された時は、
既に日は沈んでいた。

幸い、双方とも休みであったため、二人はフェイトの家に泊まったのだ。

「だ、大丈夫ですよ。悪いのはフェイトさんじゃありませんし…」

エリオは慌てて切り返す。

そつだ、悪いのはあの変態仮面だよ。
別に変態じゃないけど

「「「……………」」」

再び沈黙。

作者には耐えられません。

「フェイトさんに怪我が無くて…良かったです…。」

不意にキャラが口を開く。

「……………うん。ありがとう。キャラ。」

不意な一言に啞然とするも、直ぐに柔らかなを笑み浮かべる。

この子達は自分と同じ目に合わせてはいけない。

そう強く感じるフェイトなのだった

「それにしても…」

エリオが口を開く

「あの人、何者何でしょうか…。」

「多分、この間局員を襲ったっていう人と同じだと思う。スバルが言ってた髪型に仮面について一致してたから。」

フエイトはエリオ達が知らぬであろう襲撃者について話す。

え？スバルの時に仮面の描写がなかった？
気のせいです。

「八神隊長が調べているんですね。」

エリオ達の中では、六課が解散しようともはやては部隊長らしい。

「うん、後ではやてに話すつもり。…そういえば…」

フエイトが何やら思いつく。

「「？」」

顔に？を浮かべるエリオとキャロ。

「私とあの人而降りた後、局員が来るタイミングが凄く良くなかった？」

あの人…とはゲイルの事だろう

「…そうですね。何というか、不自然な程絶妙というか…」

エリオもそれに同意。考えるように手を口許に当てる。

「でも、本当にタイミングが良かったただけなのかもしれません。それに、味方を疑っても良いことはないですし…」

キャラは2人とは別意見のようだ。

作者はどちらでも構いません。

だが確かにフェイト達の言うとおりだ

フェイト達の元に駆けつけた局員はまるで待ってましたと言わんばかりのタイミングだった。

「でも、キャラの言うとおりかもしれない。こんな時に疑心暗鬼になってもしょうがないよね。」

そう、襲撃者もあるなかに味方を疑いバラバラになるのも良いこととは言えない。

つまり情報が少なすぎる。こんな状況での判断は危険過ぎるのだ。

「それに…」

フェイトは口を開きかける。

頭に巡るは仮面の男。恐らく自身と同年代。彼は自分にバインドをかけ、留めを打った。いや、打とうした。

でも、何か違和感があった。フェイトにはそれがわからない。

「フェイトさん？」

それに…なんですか？」

エリオの一言で我に帰るフェイト

「う、うん。やっぱり何でもない。勘違いだったみたい。」

苦笑いを浮かべエリオに返す。機が熟しきちんと整理できるまでは自身の胸に留めておこう。そう考えたのだ。

「今日は何をしようか?」

そうやって満面の笑みで言った。少しでも、気が和らぐように…

「スー、スー。」

【おい、起きろ。】

「スー、スー」

【だ、駄目だこりゃ。】

相当深く眠りについてらっしゃる我らがヒロイン

ちよつと時間を遡りましょう。

「た、ただいま。」

少しお疲れ気味の調子でご帰還なさったのは我らがアイドル。レン・ヤマグチさんです。

「お帰りなさい。レン。」

部屋から顔を覗かせ、彼女を出迎えたのは彼女の母。

母の名はルーン・ヤマグチ。

彼女と同じ管理局に勤める人間だ。とは言っても、彼女は非戦闘員。通信士である。

一言で言うならば若々しい。とてつもなく綺麗という訳ではないが、娘を持つ母とは少し思えない容姿だ。

茶色の髪を肩まで真っ直ぐ伸ばし、少しほりがかった両頬。

レンが年を重ねればこうなるのでは、というほどレンに似ている。いやレンが似ているのか

ヤマグチの名は祖父が地球人である由縁である。彼女自身とその夫はミッドチルダ出身の人間だ。

「ただいま、お母さん。」

「……何か良いことでもあった？」

ルーンは微笑みながら彼女に尋ねる。

流石母です。娘のことをよく分かってらっしゃる

「?…どうして？」

「だって顔が明るいもの。」

それは暗にこの間までは元気がなかったと指す。

「そ、そうかな。」

「ええ。母さんとしてはそういうレンでいてほしいわ。」

レンはハハハと笑いながら自室へともどる。

【ほんと、お前の母さんには勝てねーよ。】

レンは部屋へ入るなりベッドに倒れ込む。机に置かれたヴェルヴェットは喋りだした

「ヴェルヴェット、お母さんの前だと黙るもんね。」

顔だけをデバイスに向け笑いながらレンは話す。

【ああ…なんつうか、俺の入る余地無いんだよな。】

「そう?。」

他愛も無い会話。

先ほどあった戦いなど、彼らには露ほども知らないだろう。

【レン】

「ん?。」

【体、大丈夫か?】

ヴェルヴェットが問いかける。

「…大丈夫。」

レンは笑みを浮かべる。僅かにおいた沈黙があつたが、彼女は問題ないと告げた。

【…そうか。】

魔力値が高く無く、むしろ低い傾向にある彼女にあの特訓は正直危険ではあつた。

高町なのはが指導者でなかったらヴェルヴェットは反対してたろう。

「私、疲れたから寝るね。何かあつたら起こして。」

【あいよ。お休み。】

一気に疲れが襲つたのか、彼女はデバイスに先ほどとは違う気だるそうな声で話しかけると、そのまま瞳を閉じると、小さく寝息を立て始めた。

【…全く、困つたマスターだ】

時、現在。

相変わらずレンは寝息を立てる。

つまり、あれから眠りこけてる訳。

休日だったのが幸いした。
平日だったらヤバかったな。

「エス…ティ…」

寝言で何かを呟くレンであった。

「……。」「」

特徴ある三人が並んで歩く。

一人は銀髪を後頭部でまとめ、グラスンをかける男。

一人は茶髪を肩までのばし、大きめの胸を強調した大胆に胸元開くワンピースを着る女。

そして、もうひとりはやったら髪の毛がツンツンと逆立つ男。

ヴォルド、カレン、エスティの三人である。

カレンは幸せそうに彼氏ヴォルドの腕に抱きつく。ヴォルドは慣れたそれに様子だ。

そしてエスティは…凄く居づらそうに表情を固くしている。

……お前でもそんな顔をするのか。

なんで僕が…

エスティは内心愚痴る。

事の発端は朝だ。

S I D E E T H T Y

ピンポン。

マリはビクツと僕から離れた。何故だかわからないが、彼女の顔は真っ赤になっていた。

「僕が出てくる。」

そう言いながら立ち上がり玄関へと向かった、外には

「オッハ〜」

バカップルがいた。

「すまん、エステイ、後マリも呼んでくれ。たのみがある。」

「？」

深刻そうな顔をしている。ヴォルドが僕に頼みとは珍しい。聞かない訳には行かない

「一緒に来てくれ」

「断る。」

全力でぶった斬ってやった。

内容は、要約するところだ。

この間、朝にカレンの呼びかけに起きなかったのが原因で今日引つ張り回されるらしい。

そんな状況下いつ彼女が奴に襲いかかる（いろんな意味で）と、こいつは立场上抵抗できない。

そこで、僕とマリも連れてけば、万事解決。

つまりダブルデートらしい。というか、僕とマリは別に恋人じゃないのだが…。

というわけだ。

「たのむ。俺の大事な物がかかった…」

「さっさと行け。マリも嫌だろう?」

マリに顔を向ければ、彼女は顔を赤くして

「え、エスティと、で…」

などと呟いてる。

よく分からないが当てにはできなさそうだ。

「ほら、マリも行きたがってるしさ、エスティたのむ。」

すると、マリが口を開く。

「ヴォルド君、いいよ…。私は残るから、三人で行ってきて。」

そんな事を言った。

「……………」

そんなマリが居ては断れない。

つまり、【自分に行きたいけど、人目は嫌だ。だからみんな、楽しんできて】

こういう事だ。

本来なら無理にでも連れていくべきだ。

でも、できない。

以前、僕が彼女に外の空気をすわせようと街に出た。
だが

街人の好奇の視線で彼女を傷つけたただだった。

二人もこの事は知っている。

「ごめんね、マリ。ヴォルド君、いきましょーよ。」

「待て…僕も行こう。」

その結果がこれだ。

「……………」

居づらい…。ヴォルドは安心しているが、僕はカレンから無言の圧力をかけられ続けている。

彼女にしてみれば、マリと僕がセットでなければ邪魔なんだろう。何故かは分からないが、多分そうだと思う。

柄にも無く冷や汗をかきながら、カレンに念話を送る。

（カレン。）

（なあに？）

こ、怖い。地味に殺気が…。

（離れよう。はぐれた振りをするから後は二人で行ってくれ。）

すると、カレンは漸くこちらに振り向き

（ふふっ、ありがとう。）

ヴォルドに気づかれぬよう、こちらにウインクした。

あれ、体が軽い。

二人の前から姿を消すのは容易だった。
ヴォルド、すまん

今僕は路地裏に一人佇んでいる。

戻ってマリアに謝りたいが、直ぐに帰っては気を遣わせた彼女にも悪い。

「ふむ…。」

時間を潰そうにも、どうしようか。

「ここからなら、聖王教会が近いな」

僕は時間潰しにと、聖王教会の本部へと向かった。

「……………」

何を考えていたのだろうか僕は。
何故聖王教会なんだ？

他に行く場所はあつただろう。

「参礼者の方ですか？」

後ろから不意に声がした。

振り向けば、短めの茶髪に無表情な顔をこちらに向けた…男性とも女性ともとれる中性な顔立ちの人がいた。

「ここに来たのは時間潰しだが、まあそんな所だ。」

こちらは無表情で言葉を返す。すると、相手の背後から誰かがやってきた。

金髪の小さなおさをし、瞳は…右が緑、左が赤。オッドアイという奴だったか。

「あ、オットー。おはよー。」

「おはようございます、陛下。」

どうやらやって来た少女は目の前の人と知り合いらしい。しかし、

【陛下】？

どこかの王族なのだろうか

「もう、陛下は止めてって言うてるでしょ。」

どうやら違うようだ

彼女はオットーと呼ばれた者に拘ねたように言つと、こちらに気がつく。

「……………」

別に話す事など無い、無表情のままこちらを見据える少女を見返す。

「お、おはようございます。」

少女は何故か怯えながら、ぎこちない笑みを浮かべ僕に挨拶を交わす。

僕は自身の顔が険しくなっているのだと気がつく。

「ああ、おはよう。」

なるだけ精一杯の笑みを浮かべ返事を返すと、安心したのか彼女は少し緊張がほぐれた様子で

「参礼者ですか？」

と、オットーとやらと同じ質問をしてきた。

「陛下、その質問は先ほど僕が致しました。彼はまじめな参礼者にという訳ではないそうです」

オットーとやらが代わりに答えた。

「その人の言うとおりだ、ただの暇潰しだ。君こそ、失礼だがここにいるのはあまり不釣り合いな気がするが？」

見たところ、彼女がそこまで熱心な信者、という訳でも無さそうだ。恐らく何か用があると思つての発言だ。

「友達に会いに来たんです。」

…あ、自己紹介がまだでした。私、ヴィヴィオって言います。高町ヴィヴィオ。」

高…町…？

僕は 理性が 憎悪に犯されるのを 感じた

第7話 繋がり（後書き）

いかがでしたでしょうか

戦闘はこの後しばらくは入れません。

そんなにホイホイ入れる物でもないですしね

10話あたり入ったら何か閑話でも入れようか考えてます。

では、引き続き連続投稿の8話をお楽しみくださいませ

第8話 友達（前書き）

はい、こんばんは。作者です。

本日二話目の連続投稿です。

相変わらずあまり良いできとは思えませんが、皆様の暇つぶしに少しでもなれば幸いです。

さて、そんなごくはいいからゆっくりしていつてね！！！

第8話 友達

第8話 友達：絆で繋がる人間

高町なのは

僕が彼女の事で知っているのは

年が一つ上、管理局で「エース・オブ・エース」の呼び名を持つ

若くして、様々な功績を持っている。

この程度だ。

別段彼女に特別な思い入れが有るわけでは無いし、知り合いなどでも無い。

ただ、目の前の女の子が彼女、管理局の手の者の娘だと言う事が僕の中の憎悪をかきたてた、それだけだ。

僕は必死に抑えた

この子は関係ない。

この子は関係ない。

この子は関係ない。

この子は関係ない。

この子は関係ない。

この子は関係ない。

落ち着かせる、恐らく僕の態度はかなり不審だっただろう。
オットーという男(?)は無言の圧力を僕にかけ

ヴィヴィオという少女は心配そうに僕を見上げている。

「エス…」

「え…？」

「エス・ミルチだ」

呆然と口を開きぽかんとこちらを見据える少女に、名乗った。咄嗟に考え付いた偽名だが悪いネーミングではないな。

「……………」

ヴィヴィオはぽかんと僕を見上げ、見つめている。

「エスで構わない。」

僕は補足するように付け足した。
するとヴィヴィオは僕の言葉で帰ってきたのか

「え、あ、エスさんですか。呼びやすい名前ですね。」

などと言ってくれた。

先ほど僕はけっこうな覇気で睨んでしまった筈だ。
だがこの少女はすぐに笑みを返してくれた。幼いながらも芯はしっかりしているらしい。

「ヴィヴィオ、友達に会いに来たんじゃないのか？」

僕はいつまでも目的を果たさない彼女にそう返した。
僕というのは本意では無い筈だ。

「……………」

ヴィヴィオは黙り込んでしまった。
む、何か間違えたか？

「あの…。」

「?……………」

「エスさんも来てくれますか？」

「は？」

今この少女は何を言ったのか
別に僕は必要無いだろう。

そう考えていると、今まで黙っていたオットーとやらが口を開いた。

「陛下、僕は反対です。彼をイクス陛下と面会させるのは危険です。」

先ほどの反応がアレだったのかオットーは随分警戒しているようだ。
それに…僕もあまり気乗りではない。

「その通りだ、大切な友人を危険人物に会わせる必要は無い。」

僕の発言に2人とも随分驚いた様子だ。

そうだ、事実には変わらない。

「そんな事、無いです。」

だが、彼女はこう返してくれた。

「……………」

僕は何も返せなかった。

次に返してくれた言葉も、事実だったから

「少し、怖い時もありますけど、私に話す時は優しいです。少なくとも気を使ってくれます。危険な人なら、そんな事してくれません。…それに…」

「それに？」

「ママが、言ってたんです。名前を教えたらお友達って…。だから。」

「…すまない、無粋な発言だった。」

そう言うしかなかった。

つまり、彼女は新しく出来た友人を友人に紹介したい。

それだけなのだ。浅はかだったなのは、僕のほうか。

「分かりました。陛下がそう仰るのなら。」

オットーも折れたらしい。

「ありがとうオットー。エスさん、構いませんか？」

「ああ、紹介してくれ、君の友人を」

しかし、エース・オブ・エースがそういう事を言う人物だとは思わなかった…。

教会に入り、礼拝堂を抜け、奥の宿舎のような所に彼女の友人はいた。

機械に繋がり、点滴を打たれ、ベッドに安らかに眠っている彼女の友人が

そう、彼女の友人は眠ったままの友人だった。

「ごきげんよう、イクス。今日は紹介したい人がいるの」

彼女はまるで、本人が聞いているかのように話しかける。

そして、僕に視線を向け促すように笑う。

…柄じゃないが、まあいいだろう。

「はじめまして、エス・ミルチだ。先ほどヴィヴィオと知り合った。君の事は概ね彼女から聞いた。僕でいいなら友人と想ってくれると嬉しい。」

柄じゃないが、悪くはなかった。

その後、喋らぬ友人ととりとめも無い事を語った。時刻はもうすぐお昼となる。早いものだ。夢中になってしまった。自身の立場を忘れるほど

「昼、か。そろそろお暇しよう、楽しかった。」

「私達もです。また：会いに来てください。」

彼女は少し寂しそうに言った。

「ああ、必ず。」

強く返した。二人の新しい友人に笑いかけながら

教会内を歩く。

すると、一人のシスターと目があつた。

半袖の修道服という少しおかしな格好の水色の髪をしている。こちらを見ていたもんだから

「なにか？」

と邪険に聞いてしまった。

「ヴィヴィオとイクスの友達になってくるから、お礼を言おうと思つて」

「おかしな事を言う。僕は見返りが欲しくて彼女らの友人となった訳じゃない。」

「違う。ヴィヴィオ、イクスに話してる時どこか寂しそうだった。でもあんたとイクスに話してる時はそういう感じの無かったから。」

なるほど、つまりこのシスターも彼女らの友人なのだ。

その友人に善き変化を与えた者に礼は当然。

「なるほどな、無粋だった。すまない。」

「気にしないでよ。こっちとしては、あの子達と仲良くして欲しいだけだからさ。」

アハハと笑いながら、目の前のシスターは笑った。その素直な笑いにこちらにも思わず顔が綻ぶのが分かる。

「ああ。じゃあ失礼する。」

その後、僕が部屋へとついたのは昼過ぎであった。

「おかえり…2人は…?」

「ああ、落ち着いてきたようだから、こっそり抜けてきた。昼からくらいはマリと一緒に過ごそうと思ってな」

帰りが想定していた時間より遅くなっていたために、申し訳なさに言ってみた。

「そ、そうなんだ………ありがとう……。」

「?…顔が赤いぞ、どうかしたか?」

だが、マリは顔を赤くしたまま目を合わせてくれない。

やはり、怒っているのか？それとも何かおかしな事でも言ったただろうか。

たまにマリがよくわからない。

そうだ、今度マリを彼女らに紹介しよう。

彼女らなら、きっと受け入れてくれる。

「マリ、飯にしようか。」

先ずは寂しい思いをさせた分、午後は彼女と過ごそう。
そして、話してみよう。新しい二人の友人の事を。

「…無理だよ。」

ひとしきり僕が彼女に話終えた時、彼女が言った台詞はそれだった。

「私も何度が、みんな以外の友達が欲しいって、思った。でも同時に無理つてのも分かった。みんなが私を受け入れてくれる事自体が奇跡。だったら、これ以上望むなんて罰が当たるって。」

と、無理をして笑みまで作って言った。

「……………」

そうだった。彼女の心に染みついた人への恐怖という汚れはそう簡単に落とせる物じゃない。

「いいの、私は、今、とても、楽しいから。」

だが

「マリ。」

それも洗わなければ

「なに？」

落ちない。

「僕を、信じて欲しい。絶対に、お前を傷つけない、もし彼女らがマリを傷つけたなら、手を切る。」

「……………」

マリの気持ちはよくわかると言えば嘘だ。僕はマリじゃないし、そういう経験などした事は無い。

「……………」

返されたのは沈黙

「返事はいつでも良い。だがマリ、一つ覚えててくれ、世の中、僕らのような人間が少ない訳じゃない。」

「…うん。」

彼女は俯いたまま、それだけ答えた。

不器用な物だ、埋め合わせをするつもりが、よけいにほじくり返してしまった。

S I D E O U T

「……………」

真っ昼間から画面を睨みつけながら作業するのは八神はやて。

何をしているか？

フェイトと交戦した仮面の男。おそらく、スバルが証言した人物と同一人物であり、今彼女の手元にあるデバイスのデータとフェイトが証言したデバイスの形容に合うものを探している。

「だめや…やっぱり、それっぽい形じゃ断定できひん。」

そう、デバイスは千差万別。形だけなら珍しい物を除外し、似た物はたくさんある。

フェイトの武器の形容の説明がいくらしっかりしてても似た形はいくらでも存在する。

「こうなったら直接本人割り出すしかあらへんなあ…」

だがそれこそ、干し草の山から一本の裁縫針を見つけするような物だ。

「バインドが…消えた…」

一番の有力情報はこれだろう。

他人の魔法を無効化など聞いた事が無い。
おそらくレアスキル。

ここから手繰り寄せるしかない。

「多分、無理やろなあ…」

と、はやては呟きながら大きく伸びをする。

「はやてちゃんはやてちゃん」

今まで彼女の画面を見ながら黙っていたリインフォースが口を開く。

「どしたん？」

「全然関係無いかもなんですけど」

リインフォースが言うには

彼女が試験監督をし、その結果報告時に、少し態度が変わった人がいたという。

「結果発表の時ってみんな凄く緊張して、それ以外頭に無いつて感じなんです。でも、その人はどこかの空で、結果発表に集中してないって感じてました。ヴィータにも叱られたです。」

「でも、そういう人、どこにでもいるんじゃないか？もしかして、ただ悩みがでただけかもしれないし」

「私もそう思ったです。でも、その日はスバルが倒されたって報告が知れ渡った日なんです。それで、もしかしたら……って」

……この幼J…この女…できる……！
リインフォースの意見は妥当だった。
確かにその人物なら、何か知ってる可能性は0ではない。

「リインフォース、その人の名前は？」

「えっと特徴的な名前でしたからよく覚えてますです。確か」

そして、お昼。

昼休みになり、私は椅子に座ったまま背筋を伸ばし、凝り固まった筋肉を解す。

【おつかれ。】

「ん。さて、ご飯、ご飯。」

すると、同僚の一人が私の肩を叩いた。

「ん？何？」

「レンにお客、八神二佐。あんた一体何したの？」

は？

よくわからない。

「もう、新手の冗談？全然面白くな

」

私はアハハと笑いながら同僚であり、最近仲良くなった彼女に返す。
ん？表情が凍ってるんだけど…

「こんにちは」

「！？」

後ろから突然、独特の訛りが入った言葉で話しかけられた。

振り返ると

「レン…ヤマグチさん、あってる？」

私の名前を読み上げるように言いながら、八神二佐が首を傾げていた。

なんで？

誓って言える。私は悪い事（ゲイルへの鉄拳除外）も、何か間違った事も

したつもりは全く無い。
あるとしたら濡れ衣だ。

もちろん、クビになるような致命的なミスもしていない

ならば、何故この人はこんな下っ端の私に会いに来たのか？

「あれ？違った？

人違い？」

「あ、いえ、合ってます。あの、私になにか？」

「あ、そう構えんくてええよ。ちよつと聞きたい事があるだけやし」

聞きたい事？

八神二佐が知りたいような情報を私が持つてる訳が……
いや、ある。

「…場所変えませんか？ここは人もいますし」

少し、トーンを下げる。私なりの臨戦態勢のつもりだが

「ええよ。話しやすい場所で」

この人にはこういった物は通じないらしい。

「で、話したい事ってなんですか？」

私は昼食を持って、なるだけ人のいない場所を選んだ。

トゲトゲしい態度を続けているけど…やっぱりこの人には意味無い
みたい。

「せやな、最近起きた襲撃事件、知ってるやろ？それについて何か

知ってへんかなって。」

やはり、でもこの人に言っているのだろうか。
信用できない。

「そのまえにひとつよろしいですか？」

「ええよ、なに？」

「どうして私なんですか？新人さんや、局員なら他にもいます、八神二佐の様子から手当たり次第にって訳じゃ無さそうですし」

八神二佐は、うーんと唸りながら黙っている。

いいにくい事なのか、説明しづらいのか
いづれにせよ、ピンポイントで正解に至った理由がわからないまま
話すつもりは無い。

「それは私が説明しますです。」

そんな声から、八神二佐のバッグから、水色の髪の文字通り【小さな】、少女が現れた。確か、リインフォース曹長…だったかな…。

「うーん、お願いできるか？リイン？」

「はいですー！」

元気の良い返事を上げ、宙に浮いたまま彼女はおどけた様子でビシツと敬礼をすると、事のいきさつを話し始めた

「私が…ですか…？」

「はいです。」

彼女によると、リンフォース曹長と、ヴィータ三等空尉が私達に結果通告した際、緊張のゲイルをよそに、私は随分上の空だったらしい。

ゲイルが緊張してた分、浮き彫りになったみたい。

そして、その日がたまたま例の襲撃が知れ渡った日と被っていた。

それで私が怪しいと踏んだらしい。

「で、何か知ってる？」

八神二佐は私を覗き込む。

私は、どうするべきなのか

「知りません。」

答えはノーだ。

正直、この人は信用できない。勿論、嫌いとかではない。現状信頼するに値しないという意味合いだ。そうほいほいと話せる事じゃない。アイツは私の、友達なんだから。

「そっか、ごめんな、時間取らせて。ご飯ゆっくり食べてや、私が言っておくから。」

八神二佐はそう言うのにこりと笑いながら、私の前から去って言った。

「……………」

【やば、ちょっと良い人だったかも。】

突如、だまっていた、ヴェルヴェットがしゃべりだした。

「何故私の考えがわかった。」

【なんとなく。】

よし、今後の事も考えてコイツを調教せねば。

【……………。なんか危険な事考えてない？】

とりあえず無視、さあてどこから調教してやるつか……

「……………」

【あのー…マスター？】

無視しないでくれます？】

急に敬語になった我がデバイスの言葉も無視し、私は黙々と昼ご飯を頬張るのであった。

その少し後、廊下にて

「リン。」

「はい、絶対なんかあるです！」

……。なんだ、この黒オーラ。

「ちょっと彼女の事調べてみよか。」

何か掴んだような満足げな笑み。

リインフォースも「はいです！」などと元気な返事で返し、一人と一機は廊下を楽しそうに、意気揚々と、歩を進めるのであった。

……。流石、管理局の狸……。

第8話 友達（後書き）

改めて読み直して見ると、中々恥ずかしいもんですね（笑）

まあそんなこと言っても始まらないので

ほそぼそとがんばりますか

いかがでしたでしょうかEdge of Avenger第8話だ
んだんグダグダ感が

マックスな気がしないでもないですが、そこんところは自分に才能が
無いんだと割り切るか

とつと読むのを辞めるかにしてくださいね

次回更新予定は未定ですが、今月中にはコピペしたいと思います

ではでは

第9話 亀裂（前書き）

おはようございます。作者です。

随分と間が空いた気がします

さて、そろそろ元の投稿してある小説に追いつきそうです。
追いついた暁には多分もつと更新が遅くなると思いますので、そのあたりご勘弁を。

そろそろ戦闘シーンが書きたいですが、なかなか思うとおりにならないですねー

まあそんな御託はともかく、ゆっくりしていつてね!!!

第9話 亀裂

第9話 亀裂：人との間の不可視の溝

「……………朝…？」

だるそうに体を起こすのは久しぶりの我らが主人公（笑）
ゲイル君です。

「う……………あ……………」

覚束ない足取りで部屋を出る。
因みに二日酔いとかじゃないよ。

「…………………………」

震える手で水をコップに注ぐ。

「んぐ……………んぐ……………」

水を飲み込む。その無味すら苦味に感じる。

「大丈夫だ。とりあえず、体は動いてる。」

前もって買いだめしておいた、携帯ゼリーウィダーみたいな食料を手に取り、数分で
飲み干す。

「さて、今日も頑張らないとな。」

朝日の差す窓の前で大きく伸びをする。そこには、既にいつものゲイルがそこにいた。

「さて、着替えるか。」

着ていた服を脱ぐ。

着替え、そして顔を洗い、鞆を持つ。その間、わずか40秒。え？早いかわからない？

学ラン使って鞆用意してやってみろ、多分倍はかかるだろうよ

「いつてきます。」

誰もいなくなつた我が家に言葉を発す。当然誰も返さない。

「ふう……。」

小さなため息をつく。そして、きびすを返す。

ふと、玄関特有の靴入れ上の何も乗せられとない小物置きが目に入った。

「なんか、置いておかないとな」

道中問題なく、自身の仕事場にたどり着く。

今日はレンには会ってはいない。

まあ、待ち合わせをしている訳じゃないため、当然と言えば当然。

ゲイルは、何故かあの仮面の男について思索していた。

【マスター、如何しました？】

胸にかけたデバイスが語りかける。もちろん本体は服の中だ。一応公務員、ほいほいアクセサリーをつけてる訳には行かない。

「ん？ああ、何でもねえ。」

【そうですか。あまりご無理をなさらず】

「あいよ。ありがとな。」

少し頭によぎった程度の事を逐一話し合っても仕方ない。

そう、考えたのだろう。彼は自身の愛剣にそう答えた。

「さて、昼飯昼飯。」

一段落。首をパキッパキッと鳴らし立ち上がる。

今日、彼はお昼の用意をしていない。

休みのうちに買いに行こうと廊下に出た時。

「「あ。」」

目の前には金髪をストレートに伸ばした女性。フェイトその人がいた。

「こんにちはっす。」

軽く頭を下げる。

顔は知ってるが、彼女とゲイルは親しい訳ではない。
そのまま横を過ぎる筈だった。

「あ、ちよつと、いいですか？」

「…なんすか？」

呼び止められ、当たり前障り無い表情を作り、フェイトを見る。

「この前助けてもらって、まだお礼をしてない、と思ったので……」

「タメでいいつすよ、執務官と下っ端ですし。あ、俺、ゲイルです。
ゲイル・マリオネット。」

笑顔を作る。当たり前障り無いよう。

「あ、私はフェイト、フェイト・テストロッサ・ハラウン。じゃ、
じゃあ、ゲイル、でいいかな？」

「大丈夫つす知り合いもそう呼ぶんで、フェイトさん。」

表情は少し固いゲイル。それでも笑ってフェイトと会話を続ける。

すると、彼女は突然こんな事を言い始めた。

「敬語は、出来れば止めて欲しいな。同い年みたいだし」

「いいんすか？下っ端にそんな事で。」

わざと他人行儀を強調する。こいつの悪い癖だ。
だが

「うん、知り合いも、私より階級は低いけど、友達みたいに話してるから。」

彼女には通用しなかった。

「そ。じゃあフェイトって呼ばしてもらってから、よろしく。」

「うん。よろしく、ゲイル。」

友達二号。おめでとう。

「で、俺を呼び止めたのはそれだけ？
だったら俺、昼飯買いに行っちゃうけど。」

明らかにフラグが立ちました。

「そうなの？じゃあ、一緒にいいかな？私もこれからお昼だから」

そして見事に回収。本当にありがとうございます。

ぐしゃ。

時同じくして、レン。

彼女もお昼みたいです。

ぐしゃ？ああ、紙パック握りつぶしたみたい。

【どしたよ。】

「いや、なんか今ゲイルに凄く良いことがあった予感がした。」

【さいですか。】

こいつはゲイルが嫌いなんじゃないだろうか…。

さらに場所変わり、ここ、管理局のどっか

「そうかな…？」

「自覚なかったのか…」

話してるのは見事フラグ通り昼飯を【一緒に】頂いてるお二人さん…羨ましくなんか無いからな。

「フェイトお前、結構目立つぞ？いや、お世話じゃなくて」

「自分じゃ、よく分からないな。」

「ま、だろうな。」

会話が途切れる。

まあ、ここまで別に気まずかった訳じゃないので問題はあまり無いのだが

「ね、ゲイル。」

唐突にフェイトが口を開く。

「ん？」

昼飯を食べながら、フェイトには向かずに返す。

「間違ってたら、ごめんね。…私と話して…つまらない？」

ゲイルの手が止まった。

「……………」

ゲイルは何もしゃべらない。

「……………」

フェイトはどうしたら良いかわからぬのか、ゲイルの言葉を待っている。

「いや、別にそういうのはねーよ。そんな相手だったら、適当に言い繕って逃げる。」

「そうなんだ、ごめんね、なんかあまり楽しく無さそうだったから。」

フェイトは安心したのか、暗かった顔に安堵の笑みを浮かべる。

「気を悪くさせたな、すまん。俺、あんまり顔に出ない奴なんだ。フェイトと話して、楽しんでるからさ。」

固い表情。笑みを浮かべてようやく顔をフェイトに向け、言葉をかける。

「なら、良かった。あ、ゲイル。一つ、聞いて良いかな？」

「ん？」

「私を助けてくれた時、凄く大きな魔力を感じたけど…あれって

」

ピリリッ

突如電子音が鳴り響く。音源は、ライトブリンガーからだ。

【マスター、お話中失礼。お電話です。】

「おう、さんきゅ。悪い、ちょっと外すな。」

「あ、うん。」

デバイス取り出し、フェイトから離れ電話に対応する。

少しばかり話をし、電話終え、戻れば

「悪い、ちょっと先輩に呼ばれちゃった。付き合ってくれてありがとな。それじゃ。」

「え？うん、昼からも頑張つて。」

「おう、フェイトもな。」

背中を向けたままフェイトに返し、そのまま走り去る。

「……………」。

どこか、寂然としない顔のフェイトが、一人残された。

そして、廊下を歩くゲイル

「さんきゅ、ライトブリンガー。」

【いえ、お気になさらず。】

そう会話をしながら、彼は有りもしない先輩の連絡の為に、仕事場に戻るのであつた。

「悪い、フェイト。」

新しくできた友人に、少しばかりの罪悪感を感じながら。

「うん、私お疲れ。」

【おう、お疲れ。今日は母さんになんか言われてんだろ？】

仕事終了。え？仕事の描写？

勘弁してください、本当に。

とにかく、レンは大きく伸びをする。固まった体はパキパキと音を立てる。

「うん、帰りに買い物頼まれてる。」

【お。善は急げ。さっさと片付けるか】

「おっけい。」

手早く、自身の荷物を纏める。…なんであの二人はこう…手際が良
いんだ…？

レンはルーンから預かったメモの存在を確認すると、足早に仕事場
から出る。

え？ルーンって誰か？

112Pに戻って出直してこい

「一人じゃ暇だし、ゲイル引っ張ってこっ。」

【いや、あいつは確か、今週は忙しいんじゃないかなかったか？】

「あ、そうか。仕方ない。一人でいこつと。」

【俺は一人とカウントされてないのな。】

「だってヴェルヴェットと一緒に歩けないじゃん。」

【なるほどね。】

そんなこんなで目的地。

買い物自体は大した量ではない。

まあ、いわゆるパシリに近い感じ。

故に時間もかからない。

「よし、こんなもんかな。」

【三回は確認しろ。お前は柄にもなく天然入ってっから。】

「柄にも無く」ってどういう意味かしら…？」

【はいはい、さっさと帰る。】

そんなコントが広げられながら店を後にする。

袋を片手に提げて、帰宅路を辿る。

「じゃあさっさと帰りますか。」

提げた袋を持ち直し、スピードを上げたその時

どかつ

「痛っ」

レンは前から走ってきた男とぶつかった。

「あ、すみません、急いでたもんで。」

男は顔も向けず、レンにそれだけ伝えたと急いでいるのは事実なのか、そのまま走り去ってしまった。

「あ……ちよつ……。」

レンは呼び止めようとするが、訝しげにその小さくなる後ろ姿を見据える。

「……ゲイル……？」

そう感じた為である。

後を追おうとするもゲイルらしき人物は既に消えている。

「なわけ……無いか。」

そう、ゲイルは確かに最近は暇は無いと言い切った。

あれが嘘についてまで自身の誘いを断るとは考え難いと思ったのだ。レンは先ほどの男を頭の片隅にとりあえず、置いておき自宅へと足を運んだ。

「ただいまっ。」

家には誰もいない。

まだ母は仕事なのだろう。

頼まれた物を居間のテーブルに置く。

「さて…」

頭に浮かぶのは先ほどの男。

今思い返せばやはりあれはゲイルな気がする。

「……。」

ペンを持ち、適当な紙に何かを書き綴るとそれを袋の傍らに置く。

まあ、置き手紙だね。

メールした方が早い気がするが。

レンはペンをそのまま紙の重しにすると、家の鍵を閉め、とある場所へと向かった。

「はっ…はっ…はっ…。」

走る。走る。走る。

「急がねーと…」

不味い。不味い。不味い。

走る男はゲイル。遅くなりそうになった仕事を全速力で片付け、うちへと向かう。

何かに追われるように。

「「痛っ」」

見たことがあるような誰かにぶつかった。当然だ。そんな速さでよそ見しながら走っていれば、人にも当たる。

「あ、すんません、急いでたもんで。」

こんなのに止められる訳にはいかない。

「あ…ちよっ…。」

その誰かの制止も無視。彼は全力で家に向かった。

「間に合った…。ライトブリンガー、頼む。」

【了解、ご武運を。アンチ・フェルト】

家に用意しておいた結界魔法を起動する。
色は無い。防御能力も無い。ただの効果領域である。

「ああ、ありが　　がはっ…。」

相棒へ、笑みを浮かべての礼は襲いかかる激痛に中断される。

始まった。彼の長い夜が。だが

キンコーン

それを中断するかのごとく、チャイムが鳴り響いた。

誰だ。こんな時に…

居留守は無駄だろう、電気をつけてしまった訳だし。自身のうっかりさを呪いながら彼は来客を確認した。

「!？」

そして、入り口前に立つ人物に彼は目を疑った。

帰り道を引き返す形で目的地へと進むレン。

【どこ行くん？】

「ゲイルんち、なんとなく嫌な予感がして。」

少し急いでいる。だんだんそのスピードは早歩きから、小走りに
大体10分ちよつとか、ゲイルの貸家にたどり着いた。

だが、何か様子がおかしい。少し疑問を抱きながら、レンは入り口に近づくが。

【ちょい待ち。】

それをヴェルヴェットが遮る。

「え？」

【いや、なんか張られてる。こいつは…結界…？多分セキュリティかなんかかとは思うが。気をつけろよ。】

確かに一般人には知覚できないようなかなり微弱な魔力の膜がゲイルの家を覆っている。

「わかった。」

レンはゆっくり入り口に近づき膜の中に入る。

ズシリ

「ッ…。」

何かが体にのしかかる。何だろうか。

【どした？】

「…何か、体が重い。でも、大丈夫軽くのしかかる感じだし。」

レンはチャイムに指をかける。

キンコーン

チャイムが鳴り響く。

何となく、何となくだがレンは息苦しさのようなを感じている気がした。

「くそっ…」

体は既にあまり言うことを聞かない。

ゲイルは体引きずるように、玄関へと向かう。

レンには、担当している仕事が忙しいと嘘をついている。

まさか、先ほどぶつかったのがレンだったのだろうか？

「何だよレン、用事か？」

扉をあけず、扉越しにレンに話しかける
なるべく、なるべく平静を装う。

「あんた、忙しいんじゃないの？」

言葉に少し棘がある。怒ってるのだろう。

「ああ…体調悪くてさ、とりあえず、早めに上がったんだよ。」

嘘をつく。仮面は得意だ。フェイトに破られたばかりだが、それでも破った人物は数少ない。

「ふーん。…で、なんで開けてくれないの？」

痛い所をついてくる。

そんな会話の最中でも、彼の中で流し込まれる魔力が暴れ回る。

「だから、体調悪いって言ってんだろ。移すと悪いし、帰れって。」

「じゃあ、なんか作ってあげる。一応相棒なんだし。」

「いや、だから　　がはっ。」

激痛はついに彼の臨界点を超えた。

ドサリと、明らかに向こう側に異常を伝える音が響いた。

「だから、体調悪いって言ってんだろ。移すと悪いし、帰れって。」

明らかに嘘をついている。

ゲイルはレンを頑なに入れようとしない。こうなったら徹底交戦。

「じゃあ、なんか作ってあげる。一応相棒なんだし。」

早く開けると、言わんばかりに攻めたてるが

「いや、だから　　がはっ。」

人間が倒れる音と、ゲイルの悲鳴で、レンはその気を無くした。

「ゲイル！？大丈夫！？」

レンは思わず扉を開く。

それは簡単に開いた、鍵がかかってなかったようだ。

開けたその時。

ゲイルは地にはいつくばり、瞳を血走らせ、明らかにこちらを睨んでいた。

見知らぬ誰かならば恐怖しただろう。

それほどまでに彼の表情と体勢は異常であった。

まるで月夜で変貌する狼男のように。

だが、レンにはそんなのは関係ない。
関係ない、筈だった。

ガクリ

レンは体の力が異常に抜けるのを感じた。
さながら糸の切れた、マリオネットのごとく

恐怖？

いや、違う。それは彼女にかかっていた重圧が原因。

これは結界内に飽和状態になりかけた、有り得ない量の魔力。

これが、結界の用途であった。

閉じ込められた魔力は行き場を失い、レンのリンカーコアへと供給される。

魔力数値の低さがここで災いした。

リンカーコアが満タンになれば、飽和状態になった魔力は彼女の体に負荷をかける。

それが、先ほどの重圧。

最悪のタイミングで彼女の体は限界を迎えた。

ゲイルを見つめたままその場にへたり込む。

そう、彼の目には

『レンは自分への畏怖の念で腰を抜かした。』
としか映らなかった。

彼は信じられないと瞳見開く、それは徐々に驚愕から悲しみへと色を変え、ゲイルは震える手足で立ち上がり、扉を勢いよく閉じた。
ガチャリと鍵を閉める音と共に。

？

どうなってる？

レンが考えられたのはそれだけ、まかり間違っても相棒に畏怖の念を抱いたなど、有り得ない。

じゃあなんなんだ？

そう考えを巡らせていると

【馬鹿野郎！何やってんだ！】

デバイスの言葉に我に帰れた。

「分かってる…分かってるよ。でも、体が…体が言うことを…」

【は？言い訳なんざ利きたく　　】

ヴェルヴェットはそのまま黙る。気がついたのだろうか、彼女の気づかぬ危機に

【レン、今すぐそっから離れる。今すぐにだ。】

「？、どういう　　」

【早くしろ！死にたいのか？】

ただならぬ言葉にレンは動かぬ体に鞭打ち、無理矢理その異常空間から抜け出した。

「はあっ…はあっ…」

【帰ろうか】

「なん、で…ゲイルが…」

【無理だ。】

ヴェルヴェットはそれだけを言った。

実際に体が動かなかったレンにはその言葉だけで十二分であった。

「ごめん…ゲイル…。」

それだけを眩き、彼女は帰り道を体を引きずるように辿っていった。

「あ　　は　　が　　」

今宵のゲイルに安息は皆無だ。

永遠とも取れる苦痛だけの時間。

だが、彼には苦痛以外の感情を感じていた。
それがなんなのかはわからない。

ただ、明確に感じているのはひとつ。

裏切られた。

レンがそんな奴じゃないのは分かっている。でも、彼はそう思ってしまった。

レンになら…そんな感情もあった。だが現実はこの様だ。

「あ　　が　　」

信用できるのは自分だけだと、そう考えてしまう。

「うあ　　ああ　　」

だけど、友を信じたい。
そんな自分もいる。

本音と、本心のせめぎ合いによる精神的苦痛。

魔力による肉体への物理的苦痛。

このふたつの削岩機がゲイルという岩をガリガリガリ削っていく

彼の夜は

終わらない。

第9話 亀裂（後書き）

いかがでしたでしょうか？魔法少女リリカルなのは E d g e o
f A v e n g e r 第9話

一応軽くフラグ回収です。

そろそろどっかでゲイルとかレンに関するプロフィール的なのを作
ろうかなとは思ってます。

恐らく、次の投稿か、もしくはその次あたりにやるかもしれません
が、まだ未定です。キャラのイメージがつかめていなかった方申し
訳ありません。

それでは、次回投稿をお楽しみに、ではまた会いましょう。

第10話 登場（前書き）

皆様こんばんは、作者です。

数日振りの更新でございます。本日二話連続投稿となりますゆえに、この第10話のあとがきと、第11話の前書きは省略させていただきます

さて、閑話休題。自分の作品って面白いんですかね？

中々の方が閲覧してくれてるみたいなのですが。

あ、言い忘れてました。一万PV突破いたしました！これもひとえにみなさまの読者のおかげです！！

ありがとうございます。これからもよろしくです。

さて、そんな御託はともかく。ゆっくりしていつてね！！！！

第10話 登場

第10話 登場：イレギュラーとは彼の者で…

チュンチュン…

鳥のさえずりが聞こえる。

時刻は大体夜明け過ぎ。

エステイの部屋を使うマリが目を覚ます。

「……………」

彼女は傍らにおいてあった仮面をつけると、部屋を出て、珍しくこの時間帯に眠っているエステイを起こさないように、そつと家を出た。

「寒い…。」

朝方の気温が彼女の体を冷やす。

思わず身震いをするが、眠気を完全に吹き飛ばしてくれた。

久しぶりの散歩を楽しむ。

少しばかり足取りが軽い。やはり人間は外に出歩くのが一番。

「エステイも起こせば良かったかな…？」

そんな事を呟きながら歩く事数十分。

足が止まる。

それは当然だ。目の前に人が倒れているのだから。

「ど…どうしよう。」

当然ながら自分と目の前の人間以外誰もいない路上である。

仮面をつけたままたじろぐ、その仕草はやはり年頃の女性…と、そんな場合ではない。

なるべく人とは関わるのは嫌だ。

でも、この人を見捨てるのはもっと嫌だ。

「……よし。」

彼女は意を決して倒れている男性を呼びかけるように揺さぶってみた。

男は旅人なのか、それっぽいマントに身をすっぽり包み蓑虫みたいな恰好のまま倒れている

「う……。」

幸い、男性は生きている。彼女は自身のコンプレックスも忘れて呼びかけてみた。

「大丈夫ですか？」

ここで言うが、彼女の仮面は寝起きに見て気持ちの良いデザインではない。つまり怖いのだ。

「!？」

男性は体が動かないのか瞳を見開くだけして驚く。

「大丈夫ですか？」

マリの言葉に我に帰ったか、男は

「体はいたって問題はないんだが、空腹で動けないんだ。悪いけど、何かないかな？」

ハハハと乾いた声で答えた。

「えっと…待っててくださいね。今人と呼んできます。」

「ああ、すまない。頼むよ。」

マリの細腕では男一人を起こすのは難しい。男もそう考えたのか、マリの言葉に笑顔を崩さず返し、駆けていくマリを見送った。

場所変わってエステイが寝る居間。

ちょうどエステイが起きた頃だ。

マリが家を出てから数十分後ぐらいだ。

「少し早いが、マリの代わりもたまにはいいだろう。」

時計を見る。確かに「飯の支度にはまだ早い。

「さて、じゃあ早速」

「エステイ！」

口元に笑みを浮かべて取りかかろうとした瞬間、突然玄関が開き、マリが息を切らしてやってきた。ただならぬ様子に身構える。

「…どうした？局員か…？」

少ばかり殺気がこもる口調だがマリはひるまない。

「えっと…人が倒れてて…私が…えっと…とにかく来て！」

「な、なんだ一体。わかったから引つ張らないでくれ。」

予想外の返答に思わず気を崩してしまい、そのままエステイは引きずられるようにマリに引つ張られる。

マリが人と関わりを…？いや、それどころではないか…。

とりあえず、彼女の言うとおりついて行くと、行き先には、確かに男が倒れていた。

「この人、動けないみたいなの。だから…」

「分かってる、うちまで運ぼう。…大丈夫ですか？」

慌てるマリの言葉にエステイは安心させるように微笑みながら言う
と、男の腕を自身の首に回し、支えるようにして立ち上がらせる。

「ああ、悪いな、あんた。それとお嬢さん、助かったよ。ありがとう。」

男は力無く笑いながら言うと、そのまま気を失った。

「いや、生き返った。あんたらは恩人だ。ありがとう。」

男は空腹なだけだったらしく、満腹になると
先ほどの弱った様子が嘘のように元気になった。

「礼は彼女に言ってくれ、運んだのは僕だがあなたを見つけたのは
彼女だ。」

頭を深々と下げる男にエステイは頭を上げると言い聞かす。

「いや、それでもありがとう。自己紹介がまだだったな、俺はスタ
ッフ。しがない旅人だ。あんたらは？」

スタッフと名乗った男は笑顔を消さず、邪気の無い表情で二人に名
前を名乗った。

「僕はエステイ、エステイ・ドライだ。」

「私は、マリです。セカンドネームは…ありません。」

テーブルについたまま、三人はまるで取引でもするかのように互いの名を交換する。

「エステイに、マリ、ね。ところで、だ。俺はあんたらはこの恩を返したい。差し支えなければ、あんたらに何かあれば手伝わせて欲しい。」

スタッフは、二人の名前を刻むように復唱すると、テーブルに両手をつけ身を乗り出す。

答えたのはマリだ。因みに仮面は外していない。

「いいんですよ。お礼が欲しくてやった訳じゃないですから、気持ちだけ頂きます。」

「いや、そういう訳には行かない。俺は助けてもらった。だったら俺にも何かさせてくれ。それに、礼を受け取らないというのも無粋という奴じゃいか？なあ、エステイ？」

スタッフはマリの言葉に首を左右に強く振る。そして、意地の悪い笑みを浮かべて、からかうように言えば、視線だけをエステイに向ける。

エステイはしばらく考えこむと、一息入れてからこう答えた。

「そうだな、そちらの言うとおりだ。それではこうしよう。僕は多少だが剣を嗜んでいる。事情故にもっと力が欲しい。スタッフ。お前も剣を扱えるだろう？僕の鍛錬の相手をしてくれ。それがこちらの要求だ。」

「へえ、分かるのか」

先ほどまでのにこやかな笑みを不敵な物に変え、返す。雰囲気が明らかに変わっている。

だが、それに動じるエステイではない

「当たり前だ、お前を肩で背負う時にお前の手に何らかのママがあるのがわかった。僕と同じような物がな。」

「…なるほど、じゃあ隠す必要も無くなった訳だ。」

その言葉と共にスタッフはマントを脱ぐ。確かに腰には刃渡り1m弱の剣が差してあった。

……………何故持ち歩いてるし…。

どうして、持ち歩いてるんだろう…

マリも作者と同じ事を思ったようです。

その間にエステイとスタッフの会話はどんどん進む。

「OK、わかった。だが、それだと俺はマリに何も返せないんだが？」

「僕の事情は彼女にとっても同義の意味を為す。問題あるまい？」

「バアカ、それは彼女が決める事だ、なあマリ？」

二人の視線が彼女に刺さる。

「え!？」

先ほどまでツッコミに関するよそ事を考えていたマリ、当然ながら今の流れは聞いてはいない。

「お前、意外と抜けてるのな。」

スタッフの呆れたジト目がマリを刺す。

「ち、違うよ。ちょっと考え事してて…。」

「それを抜けてるって言うんだよ。」

仮面を被っててわからないが、実際少し頬を赤らめながら、必死に弁解するが、ため息と共にスタッフに軽く一蹴されてしまう。コミカルな調子の中、エステだけが彼女を真っ直ぐ見つめて言った。

「マリ、答えてくれ。僕の目的は…お前の目的でもあるか？」

「エステイ……。」

「……うん、もちろん。」

仮面をつけているが、それは明らかに恋する乙女がキュンとした態度…って何言ってるんだか…。

ああ、ここに俺の居場所はあるのだろうか。そして、エステイの奴は自覚してんのか？

そしてスタッフは密かにそう思っていた。
そんななか、彼の思考を中断するエステイの声が響く。

「スタッフ、これでも何か文句があるか？」

「大ありだ。俺は【マリに】なにか返したいんだ。間接的になんか納得できるか」

断固として妥協案に頷かないスタッフに、エステイはため息をつく。

「なあ、マリ。本当に何かないのか？
大げさかもしれないけど、俺は本当にお前に感謝してるんだ。」

「じゃ、じゃあ…。」

マリがゆっくり口を開いた。
何かを決意するように。

「私と、友達になってください。」

「……は？」

驚いたのはエステイもだ。

自分達以外の他人をよせつけようとしない彼女であるのはエステイがよく知っている。

当然、スタッフとも一歩退いて話をしていると思っていたのだ。

「え?...あれ?何か変な事...言った?」

「いや、言つてねえよ。おやすいごようだ。よろしくな、マリ。」

少しばかり呆れるような表情をしていたが、無粋と考え、スタッフは笑顔でマリに手を差し出した。

「うん...ありがと...。」

差し出され手にゆっくりと自身の手を出して応答する。

がつしりしたスタッフの手と、華奢なマリの手が互いの間に絆を築いた。

そんな中、一人エステイは一人で考えていた。

今まで一人だった彼女に友が増えたのは、彼女の友人として喜ぶべき事だ。

【嬉しい。】これは彼の本心だ。そこには欺瞞のかけらも無い。

だが、彼の中に何かが引つかかっている。

表情を少し暗くしそれが何かを考えているが、今の彼にはその答えが出せない。

「おい、エステイ...?」

思考の淵から引きずり出される。

今考える事ではない。

彼はそう自身に納得させ、スタッフを見据える。

「どした？急に黙って。」

「いや、お前とマリのやりとりの終わりを待っていた。邪魔をするのも無粋だからな。」

エステイがすました様子で椅子に座り直しながら言葉を返す

「ち、違うよエステイ！別にそういうのじゃなくて…」

マリよ、慌てるのは分かるが、作者にきちんと語らせなさい。

「ああ…こいつは放っておいて…とりあえず、よろしくな。」

「ああ、友人としても、協力者としても、よろしく頼む。」

差し出された手を掴む。つまるところ握手をしたわけです。

スタッフは、心の中で笑い彼らが悪人でないと考える。

その判断材料は瑣末な事だが、重要な事。

まず、悪人ならば少なくとも倒れた乞食同然の存在など気にも留めない。

例え助けたとしても、恐らくは利用するための道具としてしか見えない。

まずマリに関してその線は絶対有り得ない。

何しろ、恩返し的事柄を「友達になれ」という純粹極まりない内容だ。彼女が悪人なら、基本的にほとんどの人間が悪人だろう。

そしてエステイ。

これは先ほどの発言からスタッフは直感的に確信した。

エステイは友人としても、協力者としても

つまり、彼は無意識下にも彼を友人として迎えたという事。

人を利用しようとする下衆にこのような無意識な発言はできない。

それが演技という考えも除外。

例え演技だろうと、スタッフはその程度の綻びは決して見逃さない

故に【直感的】。

確信に近い直感的判断。

「ああマリ、一ついいか？」

「何？」

マリは彼の問いかけに首をこてんと傾げる。

「仮面、外してくれないか？」

彼の言葉は、声量の割に妙に部屋に響き渡った。

「……………」

二人は黙る。

もちろんマリとエステイだ。

マリは仮面越しの視線を逸らし俯く。

それをエステイは心配気に見据える。

その重い沈黙、10秒に及ぶ。

「…えつ…と」

「ふ、冗談だ。気にしないでくれ。」

彼女の言葉は待たない、その沈黙が彼にとっての答え。

彼女の仮面は伊達や酔狂などでは決して無い。

生半可な覚悟で聞いたり、踏み込んだりしてはならぬ領域だと。

彼はこの10秒で理解した。

「ち、違うの！スタッフ！君が信じられないんじゃない、その…」

マリは当然のごとく焦る。嫌われた、不信、失望。様々な不安が彼女の中にはあった。だが…

「分かつてる。別に傷ついた訳でも、失望した訳でもないよ。それはお前にとってどれほどの理由があるのか、知りたかったただけだ。その仮面の意味なんて、俺には分からないしまだ分かる資格も無い。気まぐれでいい。時が来たら、教えてくれ。」

スタッフはその悉くを断ち切った。

10話 登場（12/26）

彼の長い長い言葉は、長いようで短い、短いようで長かった。沈黙が生まれた。

エステイも、マリも、彼の言葉に言葉を見失っていた。

「…うん…ありがとう…。」

やっと出てきたマリの言葉はありきたりな、しかし、何よりも重みのあるお礼の一言だった。

スタッフは、しばらく笑みを浮かべるが、それを消してエステイに向き合う。

「そっぴゃ、エステイ。お前、目的の為に力が欲しいって言ったな。だったら、その用がある前日に俺と戦^やれ。」

「理由を聞こうか。」

「他意はねえよ。お前の能力を把握したいだけだ。」

エステイの発言にスタッフはあくまで不敵な態度。更に続けた。

「それに、お前が信念を貫くかを…知りたい。」

「？、そういうのってやっぱり分かるの？」

意味深な彼の発言に今まで2人に口を挟まなかったマリが首を傾げた。

「マリ、剣士という物にはすべからく【格】が存在する。ある程度の実力があれば、当然相手の力量もその根源も見えてくる。」

不思議そうな顔のマリにエステイが淡々と、しかし分かりやすく説明した。

「エステイにはできないの？そういうの。」

「できないな。僕にそんな余裕なんか無い。常に生き残りを考えて、最善の技を繰り出すのがせいぜいだ。…だが、この男には見ることが出来るのだろう。僕の、根源が。」

その言葉に不敵な、ニヤリという効果音が似合う笑みを、スタッフは口元に浮かべる。

だが

「違うな。当たってはいる、だけど俺はお前の大元になんか興味も糞も無い。興味があるのは、お前の純粹な力。」

彼にそんな情報は不必要。

そもそもそんな判断は、承諾した後では遅い。

剣を交えればそれはもはや契約の成立、如何に相手が外道と分かるうとも、そこで別れを切り出せば裏切り行為となり、反古にしたこちらが悪となる。

彼が見極めるにはその前段階しか無い。

その前段階に関しては先ほど究明した通りである。

「そうか、なら僕から言うことはなにも……いや、あるな。スタッフ聞くことがもうひとつある。」

まるで今考えついたかのように、一旦外した視線を再びスタッフに合わせる。

「ん？なんだよ？」

「お前、住む所はあるのか？」

「……ある。」

明らかな嘘とわかる挙動。それゆえに

「見抜くのは得意なようだが、つくのは苦手のようだな。ここを使うと良い、幸い一つ使わない部屋がある」

エステイの笑いで一蹴されてしまった。

「はあ？そんなの受けられる訳」

「お願いします。」

明らかに断りの姿勢を見せたスタッフだったが、間髪入れずにマリが頭を下げた。

「……普通、逆じゃないかねえ……」

そんな言葉呟きながら、立ち上がり

「いつ消えるか分からんこの身で良いなら。」

そんな事を言いながら、目の前の二人に向かって承諾の意と取れる言葉を紡いだ。

SIDE G A I L E

「ッッ……。」

頭が痛い…

起き上がる事すら苦痛だ。

永遠と思えた苦悶の生き地獄の夜は終わった。

今日からはいつも通りの安眠だ。

いつも通り。

だけど、何かが脳裏に引っかかっている

「気のせいだよ」

だけど、自分への慰みの言葉すら言い切れないくらい、俺の疑惑は確信に近づいていた。

「レン……」

昨夜の来客、あれは間違いなくレンだ。

そして…

「有り得ない。」

俺を見て

「有ってたまるか」

逃げた。

「……………」

考えてはいけない、そうはわかってる

「着替えないとな」

強制的に思考を断ち切り、俺は乱れた服を脱ぎ捨て、シャワーを浴びる。

降り注ぐお湯が俺の思考を瞬く間に覚醒させる

「……………」

降り注ぐお湯の中に何かしょっぱいものがあった。

それが、久しぶりに流した涙だって気がつくのに少し時間がかかった

「泣いてんのか…？俺…。」

シャワーのせいでよくわからない。

多分、あいつにだけはそんな風に思われたくはなかった。

「そうだ、あいつも…人間だ…。人間…なんだ。」

キュツと蛇口がこすれる音と共に捻りシャワーを止めた。

タオルで体を拭き終わる頃には涙は止まっていた。

「さ、今日も元気に頑張るかねー。」

ほったらかしにしていた自分の相棒を思い出し、寝室に取りに行き、俺は朝の支度を始めたのだった。

朝、通勤ラッシュな時刻より少し早い頃、レンは一人勤務先にたどり着く。

「はあ……………」

先ほどから何度目かわからないため息が宙に残滓となる。

「ため息なんてついてどうした？」

「!？」

ビクリッ。そんな効果音が似合うリアクションでレンの背筋は真っ

直ぐとなる。

「げ、ゲイル…？」

「ゲイル以外にこんなイケメンが居てたまるかよ。」

【いや、多分けっこう居ると思うぜ？】

人差し指と親指を自身の顎にあてがつて、フツと笑いながらのポーズをつけながらのゲイルの返しは、レンの胸ポケットに入る赤い正方形に否定された。

「てめえ、ヴェル。言うじゃないの。」

「！？」

その瞬間ゲイルは宙を舞った。

そりゃあ、デバイス掴むためとはいえ、レンの胸ポケ掴めばねえ…彼女の鉄拳が物を申すのは必然だったろ。

「そろそろお仕置が必要かしら？」

ふふふ…と危険な笑みを浮かべながら、倒れるゲイルの胸ぐら掴んで無理矢理立ち上がらせる。

「ちょ…不可…効力…」

「えゝ？ごめゝん。聞こえなゝい。」

瀕死ゲイルの胸ぐら掴んだまま、ニコニコ笑い可愛らしく首を傾げ

て惚ける悪女。

【作戦通り】

「てめえ… 図つたな… ヴェル…！」

【君は良い友人だったが、君の行いが悪かったのだよ！】

などと、某機動戦士アニメのコントをゲイルと胸ポケ内のヴェルヴェットが繰り広げる。

止める、分かる読者少ないから。

「はあ… 心配して損し」

損した。と言いかけて、レンは言葉をつぐんだ。

「全く、マジ死にかけたし…」

「あの、さ… ゲイル… 昨日の事何だけど…」

「んあ？」

「なんというか… ごめん。」

惚けるように首を傾げるゲイルにレンは謝罪と共に頭を下げる。

許してくれないかもしれない、そんな風に懸念するレンを余所にゲイルは考えられない発現をした。

「なあ、何の話してんだ？」

「え…？」

レンは顔を上げる。当然のごとく表情は目を見開いた驚きの表情、医者から死刑宣告を受けた、そんな表情。

「嘘、だって…」

「俺は昨日お前に会ってないし、来客なんてなかった。夢でも見たのか？」

ゲイルは惚けるでも無しに本当にわからないと、そう返し、そのままレンの横を歩き去ろうとする。だが、そんな筈は無い。彼女にとって、あのリアリティは夢では有り得ない。とっさに、反射的にゲイルの腕を掴む。

「嘘つかないで！だって、だって」

「うるせえ」

彼女の必死の訴えは、静かな一言に一蹴された。とっさにレンはゲイルの腕から手を離す。

「……………」

ゲイルは何も言わない。何も言わずにレンに背を向けて行ってしまった。

「……………」

絶句。そういった表現がいまの彼女の状態には似つかわしいだろう。
涙すら流せない。

思えば、サインはあった、気づくべきサインは…

「ごめん…なさい…」

誰に聞かせる物でもなく、彼女は呟く。

大事な相方が出した小さなサインも見逃してしまった事に。

そう、ゲイルは、笑わない。

声を出しては、笑わない。

同時刻、管理局にて、自身のデスクワーク用パソコンを前ににらめ
つこをしている八神はやての姿がそこにあった。

睨みつけるはノートである。

なにやらいろいろ書かれている。

『レン・ヤマグチ』

とかかれた円を中心に様々な方向に矢印が引かれている。

両親、相方、上司、そして友人。

洗いざらいと言える程ではないが、それでも対した量がノートのペ
ージに纏められている。

ここまでにはさほど時間がかからない辺り流石というべきか…
そして、彼女は一つの名前に目をつけた。

「エステイ…ドライ…」

そう、彼女の仕事は凄まじい早さで進んでいたのである。

そしてはやてはノートからパソコンの画面へて視線を移す。

『ドライ』この名前に見覚えがあったからだ。

「やっぱり…」

映し出されたのは、過去の大事件。

8年ほど前の『アンノウン襲撃事件』

彼女の友人が大怪我を負った大事件でもある。

「エル…ドライ。」

映る名前と、その使用デバイス。

形状は、二本の双剣。

現在所在不明。

「ビンゴ…。リインフォース、お手柄や。」

画面前にニヤリという表現がぴったりの不敵な笑みを浮かべながら、肩に乗る己の相棒に語りかける。

「……………」

まあ、肝心の相棒は啞然と画面を見つめているだけなのだが。

「どうしたん？ポーツとして。」

流石に無言のラインにはやては視線だけ移した。

「え…えつと…」

何気ない自分の一言での進展だったがためなのだろう。

未だに信じられないとでも言うようにひきつった苦笑いしかしていない。

そりゃそうだ、あの発言では僅かな展開くらいしか望めなかったがこの展開は誰からしても予想外過ぎた展開だ。

そんなラインフォースをよそに、はやては作業を再開する

「とりあえず、この人について調べてみよか」

はやては再び、ラインフォースからパソコンへと視線を移す。カタカタと小気味よいキーボードを叩く音だけが空間に響く。

物語は確実に急展開へと向かっていった。

G a i l S I D E

「……………」

正午過ぎの、昼休み。食堂の割と隅の方向にあるなぜか4人座りのテーブルで、俺は一人もそそと昼飯をかきこんでいた。

同僚から誘いはあったけど、そんな気分になれる筈も無い。

「タイミング悪いんだよなあ…」

まあ、どっちみちこれ以上友人を作るつもりがない俺にはどうでも良い話ではある。

「フェイトと友達になったのもミスだったなこりゃ…」

ため息を吐く。俺の中に渦巻く謎の罪悪感とけだるさを吐き出すように

「私になに？」

ふと、噂をすればなんとやら。

目の前にはあの金髪の美人さんがいた。

「何でもない。言う必要無いし。」

当然のように俺の対面にすわるフェイト。同僚に見つからない事を祈りながら軽くないなした。いちいち動じていたら隠せる物も隠せない。

っていうか、フェイト。お前どっから湧いて出てきた。

「……何か悩み…？」

フェイトは心配そうにテーブルに身を乗り出して俺の顔を覗きこむ。

「んー？なに？フェイトって綺麗だなーって独り言しちゃいけない？」

俺は自分でも分かるくらいに意地悪な笑みを浮かべていると自覚し

ながら言ってやった。

「!?!?!?!えっ!?!?!えっ!?!?!」

フェイトは思った以上の反応で、顔を真っ赤にしながら慌てて椅子に座り直した。

さて、話題話題：

「お前、自覚してないだろうから言うけど、びっくりするくらい美人なカテゴリーに属する女性だぞ?」

相も変わらず、俺はからかうように言っ
てやる。
まだ頬が真っ赤なフェイトに追撃だ。

「そ…そうかな…？」

「ああ、スタイルも良いし強さも折り紙つき。こんな奴。俺は知らないけど」

さて、完全に逸れたな。
後は、流れに任せて

「私の事、嫌い…かな…？」

不意に、話の流れを全てぶたぎつて：フェイトはさっきまで赤かった顔を暗くしながら俯き、そんな事を口走った。

こりゃー筋縄じゃいかないな……

大丈夫だ、こんなのは慣れっこ。よくあること。

いつも切り抜けて来た。

こんな会って数日の女に剥がせるほど俺の仮面は脆くない

「全く、何度言えば分かるんだよ。俺は別にお前が嫌いな訳じゃないって。お前、よく心配性だーとか、過保護だなーとか言われてるだろ？」

まずは話を逸らす。

わざとらしくため息をつく、安心させるように呆れ顔を作って俺は切り出した。

確かコイツはエリオとキャロに関しても過保護で有名だ的外れていない筈。

ここから話を展開させれば問題は…

「じゃあ…失敗ってなに…？」

俺の思考をよそにフェイトは疑問を消してはくれない。

元々確信に近い疑問だ。

生半可な回答じゃ逸らすことはおろか誤魔化すのも難しい…

俺とした事が、アイツの件ですっかり脆くなってるらしい。

「大した事じゃねえよ、お前は俺にはもったいない友人だなんて思っただけだ」

嘘は言っていない。フェイトは俺には不相応。
日陰に太陽はいらない。

「そんなこと…言っちゃ、だめ。」

何故かフェイトは暗い顔をさらに暗くした。
見方を変えれば【泣き出しそう】。

なんだよ、そんな顔はズルいだろ…
事実じゃないか…

必死で俺は自分を抑えた。
流されてはいけない。

このままじゃ確実に喋る。
いや、別に喋ってどうなる訳じゃないけど…。

「分かった、そういうのはもう言わない。悪かった。」

「う、うん…。」

ようやくフェイトは顔を上げてくれた。なんとなくだけど、コイツ
を泣かせたくは無い。そう思った。

仕方ない、またあんな顔して欲しくないし…あの手を使おう

「詫びに本当の事を言うよ。さっきの謎発言の答え」

「え…？」

思った通りに目の前の女はキョトン顔になる。
コイツ…本当に自分がびっくりするくらい美人って自覚してないな…

「俺さ…」

ヤバい緊張してきた。

自分でも手に汗握っていると分かる。

それくらい覚悟が必要な発言。

「う、うん。」

フェイトもそうなんだろう。ようやく答えが得られるという緊張もあるだろうし、それに俺が出してる雰囲気もまた緊張を呼ぶんだと思う。

「お前が好きなんだよ」

「……え？」

多分時間が止まったと思う。

フェイトは思った通りの反応を示した

拍子抜けというか、訳が分からないというか、つまり困惑した表情。ようやくフェイトなりに意味を理解したのか顔がドンドン真っ赤になっっていく

「えっ？…えっ？…っ、つまり…えーと…」

面白いくらいにテンパっている。俺は内心の緊張がドンドン爆笑に変わっていくのを感じた。

「ああ、お前の事が気にかかって夜も眠れない。」

深刻そうな顔を浮かべながらも俺は心の中では大爆笑。因みに嘘は言っていない、事実フェイトの事は好きだ。…もちろんライクであつてラブじゃない。

気にかかっているのも本当だ。実際に俺は厄介な友人として常に考えているし。

流石に夜眠れないほどじゃないけど

「フェイト、分かってくれたか？」

「え…えっと…ゲイルの気持ちは嬉しいけど、まだ会ったばかりというか…なんていうか…」

もう耳まで顔を赤くしたままフェイトはなんとか目線だけをこちらに向けて話している。

なんていうか、そういう所がフェイトらしい。
会って数日の俺がいえたことじゃないけど

さて、そろそろ可哀相だし切り上げるかね

「会ったばかり…？そういうもんじゃないのか…？」

多分ここで笑い出さずに無表情で言えた俺は表彰されていいと思う

「だ、だって…」

「友達ってそういうもんじゃないのか？」

フェイトの言葉にわざと被せて無表情のまま言ってやった。

フェイトは顔を真っ赤にしたままポカンとして狐につままれたような顔をしている。
ダメ…もう限界…

「ぶっ…アハハハハハハ！フェイト、お前最高の反応！
アハハハハハハ！」

笑った。

声を出して、笑った。

フェイトはてつきり顔を真っ赤にして怒り出すかと思ったが予想外の返しをしてきた
俺が彼女に対して完全に油断をしていた、と思えて仕方がない

「ゲイルってさ…」

「アハハ…はあ……ん？なんだ？」

顔をまだ少し赤くしながらフェイトは何故か嬉しそうに笑っていた。

「そんな風に、笑うんだね」

「！？」

そう、会って数日の女の癖に
アイツですら聞いた事がないようなばか笑いを
この女は俺にさせる気にしたんだ。

第11話 混沌

第11話 混沌：渦巻く物の意味するモノは…

スタッフがエステイたちと暮らす事に決定してから数時間が経過した。

空いている本来マリの物になるはずだった部屋が彼の部屋になった。

マリはエステイの部屋を使っているためである、エステイが、私物はあまり持たない人であるがゆえの必然である。

5畳ほどのなかなかの広さのある何も無い自分の物となった部屋にスタッフは壁に背を預け空をみていた。

「さて、俺は何をすればいいのかね」

そんなことを呟きながら

そしてこんなことも一人で口走る。

「しかし、なんでこの街には見覚えがあるのかねえ…」

そう、彼にはこの街が初めてでないような気がした。

もちろん事實はそうではない。彼は実際に初めてこの街に来ているはずなのだ。

彼が感じているのは、もつと根底の奥深くにあるような妙な既視感。

「思い当たる節はないでもないが…可能性が低すぎる…。」

考えても始まらないな。

そんな事を呟き、勝手に事故解決してしまった。

「はっ…なんであの時の事なんざ思い出すのかねえ…肝心なアノ想いは忘れていくくせに。」

フツと自虐的に笑い、髪をかきあげながら天井を仰ぐ。

「まあ、当面はあいつらに付き合ってみるかね」
面白そうだしな。

クククと笑いながらまたもそんなことを呟く。

その様は悪党みたいだがまあ気にしないのが無難だな。

「あ、忘れてた。」

徐に腰に隠した鞘を出し、そこから出ている何の飾り気も無い黒い柄を掴むと見事な白銀の刃を持った剣を鞘から引き抜く。
それを、彼は徐に…ズブリと…

「スタッフ、ちょっと…」

マリが部屋に入ってきたと同時に、刺した。

「何やってるの!？」

入ってきたやいなや、即座に壁際にもたれるように座るスタッフにかけよる。

「マ、マリ?…ぐ…」

まるで体が忘れていたかのように剣が刺さった部分から血が滲む。

「わ、わ…スタッフ、血がでてるよ…。」

「分かつてる…黙ってろ…。エーテル…モスト…」

おたおたするマリを軽く睨みつけ一蹴する。

魔力が収束する。

魔法陣の展開も無しに魔法が発動しスタッフの傷口を癒やす。

それと同時に進行で徐々に徐々に刺さった剣を引き抜く。

抜き終わる頃には傷は跡形も残らなかった。

「はあ…はあ…心臓に悪い…。」

スタッフは脂汗をこめかみに浮かべながら呼吸を整えてマリに視線を移す。

「あ、あのさ…マ」

バシッ

何かを叩いたような乾いた音が部屋に響き渡った。

「あー…マリ…これはだな」

平たく言えばマリからとてつもないビンタを受け取ったスタッフはその体制のまま視線だけを向け弁解するがその弁解も体同様停止した。

何故なら

「泣いて…いるのか…？」

目の前の仮面の少女は床に雫をポタポタと落としていたから。

「だって…だって…」

マリは上手く言葉がまとまらないのか、はたまた上手く言葉を紡ぐ事ができないのか、同じ言葉を何度も、何度も繰り返している。

「…ごめん。」

彼は自分の盛大なミスメイクに舌打ちをしながら、目の前の泣きじやくっている、仮面の女の子を見つめながら謝るしかできなかった。

そう、配慮が足らなかった。

彼女がスタッフへ何でも頼めるという時に

「友達になつてくれ」

と言った事や

承諾された時の笑顔すら見えるような明るい声色を出す事から

彼女に友人や味方が少ない事は容易に想像できたはずだ。

そして、その数少ない友人の1人が自殺まがいの事をすれば、彼女がどうしようも無いくらい悲しむのも

目に見えていた筈だった。

「ごめん、俺昔から詰めが甘くてさ、きちんと説明もせずにこんな所見せちゃって…」

ひたすら目の前の女の子に謝りつづける。

スタッフは、先ほどの自身の行為をかいつまんで説明をした。かいつまんではいたが、概要はきちんと伝わる詳しい説明ではあった。

「つまり、スタッフは自分の体調を調べてたんだね？」

「そ、体を魔力そのものに組み替える事で物理的ダメージはなくなるんだが、その過程でマリが入ってきたからさ、ちよいとびっくりしちまって組み替えを間違えて、物理的ダメージを負ってしまった、っていうこと。」

別にマリが悪い訳じゃない。最後にそう付け加えはしたがマリの表情は暗いままではあった。

「でも、私が入らなかったら…怪我、しなかったじゃない。」

かなり責任を感じているのかマリはまたもや泣いたばかりの赤い目を潤ませている。

「……わかった。お前は悪くないけど、責任感じてるんだったら、また飯でも食わせてくれ、それでいいだろ？」

小さなため息を吐きながら、口元に小さな笑みを浮かべながら譲歩案なのか、マ리에頼み事を言った

「で…でも…」

それでも納得できていないのかマリは不安そうに視線を泳がせるが…

「だあーっ！良いの！俺が良いって言ったんだからこの話は終わりだ！いつまでも暗い顔しやがって、笑え！笑顔だ笑顔！」

ついにスタッフが切れたのか頭をかきむしりながらマリに全く本気ではないが、怒鳴りつけそのままマリの仮面の奥の頬に指をかけ仮面がはずれぬように左右に引っ張り始めた。

「！？ふ、ふらっふ、ひらひよおー」

頬をによーんと伸ばされているため滑舌も何もあつたもんじやない喋り方で両腕をブンブン振り回して訴える。というか暗い顔って、お前は仮面しか見えとらんだろ。そんななか

「全く、何をしてるんだお前らは。」

腕組みをしてため息をつきながら佇むエステイがそこにいた。

「おお、今こいつに説教をしてた所。んで、なんだ？マリと言いお前と言い、何か聞くことでもあるのか？」

マリの頬からゆっくりと手を離してエステイに向かって僅かに笑みを浮かべたスタッフ

拗ねてしまったのか頬を両手でさすりながらマリは黙ってしまった。

「何、つまらない質問の解消と話をしに來ただけだ、お邪魔のようなら後にするが？」

クツクと笑いながら二人をからかうようにエスティは不敵な笑みを浮かべて交互に視線を向ける。

「あーいや、別に」

「全然邪魔じゃないよ、私はもういいからエスティはお話してって」
スタッフの言葉を完全に封殺し、マリは何を機嫌を損ねているのかすたこらさつさと部屋を出て行ってしまった。

「スタッフ、あまり彼女をからかうものでは無いかと思うが？」

「いや、あれは明らかにお前に対してだろうに……」

二度目になるため息をつきながらスタッフに呆れたような笑みを浮かべるが、対するスタッフはと言えば同じように呆れた表情をしている

「待て、なぜ僕なんだ。」

「お前それ本気で言っているのか？……まあ……人間誰しも欠点はあるよな」

先ほどのまでの笑みを僅かに訝しげにしてスタッフを睨む。だがそんな事にも怯まずスタッフは勝手に自己解決したのか、肩をすくめただけで話を切ってしまった。

「？……話を戻す。お前には聞くべき事と話す事があるんだ。」

「分かってるよ、大体察しはつくが……まあ話してみな」

先ほどまでの二人の穏やかな調子は消え去り、エステイは復讐者、スタッフは契約した者としてお互いに向き合った。

「そうだな、まずは質問からさせてもらおう、これを解決しなければ話をするのに僕が集中できないからな。」

「……………」

黙り込むスタッフ、エステイは続けろという意で捉えたのかそのまま口を開いた。

「単刀直入に聞かせてもらおう。」

お前は何者だ。

「ハッ… ホント、つまらない質問だな。」

エステイの言葉を足蹴にするかのごとく笑い飛ばし吐き捨てるようにスタッフは言った。

「誤魔化すな。質問に答えてもらおうか。お前は何者だ。どこの、誰なんだ。」

弾丸のようにスタッフへ向けて放たれるエステイの言葉。だが、その程度では彼はひるまない。

「誰も何も、俺はそこらへんにいる浮浪者だ。少しばかり居場所が定着していない、がな。」

完璧とも言える冷静な切り返し、だがその完璧な冷静さが逆に不利を招いた。

「ほう、それは、可笑しいな。」

クックククと、まるで尻尾を掴んだとも言っているかのようなうだ。

「へー、言ってみろよ。どこがどう可笑しいんだ？」

対するスタッフも売り言葉に買い言葉。
不敵に笑いながらも視線は凍てついている。

「先ほど少しばかり調べ物をしてな、僕がよく情報を取引する男と少しばかり話をしてきた。そいつは少なくともミッドの墮落した人間、つまり浮浪の者については誰よりも詳しい。そう、あんなわかりやすい場所で倒れていたなら、とっくの昔にそいつはお前の事知っている筈なんだ。マリが見つける前に、な。この街に足を踏み入れたのは確かだからだ。」

淡々とエステイは語る。相手の矛盾と捉えた所に的確に言葉を撃ち込んで。

「それで？」

が、スタッフはそれを

「何が可笑しいんだ？」

いとも容易くその弾丸（弾丸）を回避した。

「おかしくはないか？街で一番情報を持っているような人間より先に」

「マリが俺を見つけたのが変って事か。そうだな、確かにおかしい。」

エステイの言葉と表情に未だ濁りも迷いも無い。
だが、スタッフの肯定の言葉と

「確かに変。だが、それだけだ。」

「な……に……？」

次に放たれた言葉にエステイは僅かに動揺を起こした。

「お前の言い分は間違っではないいな。だが、俺は確かに街には自分の脚で入った。何か特別な事はしていない。

たまたま、たまたまそれをそいつが知る前にマリが俺を見つけた。それだけだ。お前の考えている疑問はただの、杞憂だ。」

動揺を見せたエステイにスタッフがたたみかける。

結果的にエステイの言葉は彼自身の動揺とスタッフの言葉に封殺された。

エステイの言葉には確かに的は射ている。が、確たる証拠がない。スタッフはそこをついているのだ。

俺を知りたければ、情報だ。

もつと情報を持って出直してこい。

「……そうか、なら、この話は終わりだ。話を変えよう。」

一息つき、先ほどまであった復讐者の雰囲気は消える。

それに答えるかのようにスタッフも、エステイに向けていた先ほどまでの雰囲気改める。

「で、もう一つの話ってなんだ？」

静かにスタッフは尋ねる。先ほどまでの雰囲気とは違い随分と穏やかでどこかけだるさを感じられる。

「ああ…一応、僕らの友人をお前に紹介しようと思ってな。」

無表情でエステイは答える。

無表情ではあるものの、随分と優しい感じが感じられる。

「友人ねえ…共犯者の間違いじゃなくてか？」

けだるい調子は抜けずに不敵な笑みを浮かべてクスクス笑いながらスタッフはジト目を返す。

「フツ…察しがいい。その通りだ頼りになる、二人だ。」

対するエステイもニヤリと効果音すら出てきそうな笑みをお返しした。

「で、お前の事だ。もう手配してあるんだろ？」

瞳をゆっくり閉じながら会って数時間しか経たぬ男の性格を勝手に考え、尋ねる。

「ああ、そろそろ来る頃だ。」

だが、その考えは間違っでは居なかったらしく。

エステイは既に【あの二人】に連絡を入れていた。

トゥルーン

その言葉をまるで待っていたかのごとくらいチャイムが鳴り響き、
マリンに連れられ

「はあゝい」

「よお」

あのバカップルが部屋に入ってきた。

「はじめましてえゝカレンって呼んで頂戴」

まるでキラッ という効果がつきそうウインクと共に最初に声を上げたのはカレンだった。

「どうも、この女の彼氏のヴォルトだ。

つたく、お前もあれだなおかしな奴に捕まっちゃったな。」

片手でガシガシと自身の後頭部をかきむしり、グラサンを外してスタッフを一瞥すると皮肉混じりに言い放った。

「自己紹介はまあ不要だろうが、スタッフだ って何じつとこ
うち見てるんだ。」

閉じていた瞳をゆっくり開きながら自身の名を紡ぐスタッフであったが、カレンから視線を感じた為にか、言葉を中断してカレンに返した。

「いいえ…？…女の子…？なんて思ったからビックリしただけよお？」

クスクスと笑いながらまるで惚けるかのように遠回しに返す。
さりげない冗談のつもりなのだろうが。

「なっ……………！？」

彼には大ダメージだったご様子で、怒りか、驚きか、口をあんぐりと開けたままフルフルと体を震わせている。

「おおくなるほどな、確かに女に見えんくもいな。」

「うん…スタッフ、髪綺麗だし…」

「……………」

残りの四人のたたみかけ（約一名は除外）にスタッフは次の瞬間、部屋の隅にうずくまってしまった。

その後、数十分間。

四人は彼を立ち直らせるのに少ばかり時間がかかったようであった。

「で、だ…そこのお二方は何か役割でもあるのか？」

ようやく放心から立ち直ったのか、しきり直しと言わんばかりに咳払いをし、バカッフルに向かって尋ねた。

「ワタシはそうねえ、機械関連を携わってるって言えば分かるかしらあ」

いかにも、考えてます。と言わんばかりに人差し指を唇に当てて答えるカレンの言葉は意外であり、わかりやすい返答であった。

「へえ、人は見かけによらないな。お前はどうか、ヴォルト。何か特別な役割はあるのか？」

役割があるのを知りたかっただけなのか、呟くように相槌打てばスタッフはヴォルトに視線を移す。

「俺か？エスティの打ち合いの相手……って所だ。大した相手になれちゃ居ないがな。」

恋人同士やることは同じなのか、同じく考えてますと腕組みをしながら唸り、思い出したかのような返答を返す。

「おっけ、大体分かった。」

二人の言葉が納得する物だったのか、頷きながらスタッフ一人でそう呟くが、

「で、スタッフさんよ、俺らはお前さんをどう信用したらいいわけ？」

ヴォルトの一言で、場の空気は凍りついた。つまり、信用に値しない。そう彼は言いたいらしい。

「ヴォ、ヴォルト君！」

マリは慌てて弁解を立てようとするが、スタッフの制止に仕方なく止まる。

「一理ある。それじゃあ、アンタらに俺の能力を見せよう。」

スタッフは立ち上がりながら呟く。

その表情にはどこか不敵な含みすら感じる。

あの時感じていた、妙な既視感…俺の直感が正しければ…

スタッフはゆつくりと心の櫛鉄を下ろした。

「どうだ？自分から疑惑をばらまくような不利に成る事をやってみたわけだが。」

視線をヴォルトに向ける。

全く感情がつかめなかった、その表情は明るい方に歪み、笑顔となった。

「そうだな、信用してくれるなら、信用で返さなきゃ、嘘だよな。」

クスリと冗談でも言うような口振りで呟くと

オーケー、わかったよ

などと言いながら両手を上げて、ヴォルトは観念したようだ。

「まあ、お前らが何をするのか知らないが、エステイの目掛け程度の役割は担うよ。」

エステイの方を視線で示しながらスタッフは言った。
そして補足するようにこうつけ加えた。

「何かあるなら、言ってくれば、力に成ろう。エステイらにはそう言うてある。後、何か行動を起こすなら事前に伝えてくれると助かる。」

スタッフの言葉に周りの四人は一樣に頷き、了承の意を示す。

「ところでエステイよ。そろそろ次の行動プラン、教えてはくれねえか？」

話が一段落した時、最初に口を開いたのは、ヴォルトであった。

「ああ、予想外の人間が1人増えたが、今一度行動を起こす。」

スタッフ以外の者はエステイに視線を向ける。

スタッフはと言えば、あくびをしながら頭をカリカリかいている。

「僕の予想があっていたらば」

エステイの言葉待たずにスタッフは立ち上がった。まるで自分には関係ないとも言つように

「どこへ行くんだ。スタッフ。」

当然ながらエステイが怪訝な表情を浮かべて咎めた。
たが

「俺には関係はないからな。内容についての俺の干渉は俺の好きにさせて貰う。」

感情の無い冷めた瞳でエスティらを一瞥すると足早に部屋を出て行ってしまった。

「…まあいい。表立った動きはまだ、僕1人でやらせてもらう。奴らにお前たちの存在をまだ把握されたくないからな。」

スタッフの妙な態度に釈然としない口調ではあったが、エスティは話し始めた。

「お前1人で大丈夫なのか？前はなんとかあったが、流石に二度目は無いぞ。」

意義を唱え始めたのはヴォルト。

口調こそ軽く感じるが表情にはどこか刃のような鋭さがある。

「少しばかり本気で行くから問題は無い。並の局員程度ならば、僕の足元にも及ばん。」

ヴォルトの反論にエスティは瞳を閉じながら静かに話す。表情こそ穏やかだが、逆に口調には棘がある

「そうよねえ、エス君の実力だったら、そこら辺の雑魚じゃあれこそ羽虫みたいな物よねえ」

クスクスと笑いながら、カレンはからかっているのか、本気で言っているのかよく分からない発言をする。

「うん、だってエスティ、強いもんね。」

マリはと言えば邪氣の全く無い声色で何故か嬉しそうな雰囲気さえ伺える、

「マリ、今回からお前は僕をサポートしてくれ。」

「うん、分かった。任せて。」

マリに向かい、いつも彼女に向けるのとは違う、復習者の表情で、エスティは語りかけた。

マリは意志の強い瞳で笑いながら答える。

「あー…エスティさんよお、そういうのはだな」

実にめんどくさそうに口を開いたヴォルトの口を塞いだのはカレン。正確には自身の胸元の顔を埋めさせたんですが。

「ヴォルト君ったら、羨ましいならそう言えばいいのにい〜。」

などと言いながらさりげなくマリに視線を送る。

マリは意図が掴めたのか、顔を少し赤くした。

肝心なエスティはキョトンとしているが…

場所変わってここ、時空管理局。

過去の資料を漁ったいたのは、はやてとなのは

「ごめんなあ、せつかくの休み時間に、私の探しもんに付き合ってくれて。」

「いいよー、気にしてない。手持ち無沙汰になるよりは、はやてちゃんのお手伝いの方が楽しいもん。」

資料に目を通しながら、はやてはなのはに苦笑いを浮かべつつ謝るも、なのはの方は全く気にはしていないのか、同じく目は向けるもクスリと笑った。

探している資料は、過去の訓練生のデータ。

はやては、レンに縁の有った物を片っ端から当たっているらしく、ここもその一つ。

そこで、教導官でもあるなのはに頼み訓練生の資料を探してもらっている。

この間のレン然りで訓練生の名前は大抵頭に入っていた彼女は【エスティ・ドライ】の名前に覚えが有るというのだ。

善は急げ、お互いの休憩時間に資料が有るこの部屋に籠もり先ほどから手がかりを探しているのだ。

「おっかしいな…その子の資料はこの辺りにある筈何だけど…」

資料を漁るのはが呟く。彼女の記憶通りならエスティはレンの同期だという。

だが、肝心の資料に彼の名前を記すデータが無い。

エステイと同じ頭文字は居なかったためにその箇所には彼のデータだけが残って居なければおかしいのだが

そこには別の人物の資料が残って居たのだ。

「うーん…私の記憶違いだったのかなー…」

過去の訓練生の記憶を曖昧にしてしまった事に罪悪感があるのか、少し表情を暗くして呟く。

「なのはちゃんの記憶は正確やから、そんな事滅多に無いと思うけど…。」

そう、はやてはこの資料の残り方に妙な違和感を感じていた。

なのはが記憶違い…というのも有るが、もっと奥に潜むおかしい歪み、有る筈の無い…有り得ない歪み。

そんな歪みという違和感をなのはも感じて居るのか、未だに先ほどの箇所から他の箇所に移ろうとしない。

「取り替えられた…？」

不意にはやてが思いついたように呟いた。

「え…？」

予想だにしない思考だったのか。

はやての呟きになのはは思わず資料から視線をはやてに移した。

「元々ここに有った資料が消えて、別の物が入れた、そう考えるといろいろ合点が行くんやけど…なのはちゃん、この資料の人、元の場所分かる？」

はやてはおもむろに、エステイの資料が有った場所だと思われる場所に有った資料をなのはに渡した。

コクンとなのはは無言で頷き、場所が分かるのか的確に場所を指定し、棚を開いた。

「……………」

元有った場所は相当窮屈につめられていたのか、開いた所には、僅かながら引き抜かれたような後が残っていた。

誰かが確実に引き抜いたとしか考えられないそれ。

「これって…どういう…？」

なのはは呟くと共に隣で黙る友人に視線を向ける。

その友人、はやてはと言えば、これがいつ行われたのかなど考えを巡らせていた。

だが、思考を巡らせれば巡らすほど、考えれば考えるほど、闇が混ざりドロドロとした沼になっていく。

まず、発端は先日の襲撃事件が関与しているのはまず間違い無い。あの仮面の誰かがここを荒らしたと見て、間違い、無い。ただ、問題なのはここから。

なぜわざわざ痕跡を残して行ったのか。

自身のが抜ければ、そこに空白が生じる。何も知らなくとも異常と
感じはするだろう。

だから、引き抜いた。

それなら、理由は分からなくも無い。

なら何故、痕跡を残し易い場所に入っている物を、わざわざ替え玉
に選んだのか。

時間がなかったとは考えづらい。随分と冷静に引き抜かれている。
どう見てもこのズレ方はわざわざ残したようにしか、見えない。

そこがはやてには疑問だった。

仮説を立てれば立てるほど謎という闇が膨れ上がっていき、そこに
残った真理が埋もれていく。

私もまだまだやね…

そんな事を1人頭の中で呟き、不意に

「はやてちゃん。」

なのはの呼びかけに現実に戻された。

「大丈夫？」

はやてが相当深刻な顔をしていたのだろうか。
なのはは心配そうに彼女の顔を覗き込む。

「大丈夫、ちよつと考え事してただけ。ありがとうな。」

にこりと目の前の友人を安心させるように、笑顔を浮かべて返す。ふと、時間を見れば間もなくなのはの休憩も終わる。彼女が指定した時間のリミットが目前に迫っていた。

「なのはちゃん、時間、大丈夫？」

視線だけを向けて問いかける。もちろん今から戻れば、まだ大丈夫な範囲。

「うーん、もうちよつとお手伝いしたいんだけど。そろそろ行かないと…」

なのはも時間を確認すると、苦い顔を浮かべて返す。

「気にせんでええよ。私の方はもう大分まとまってきたし、もう大丈夫や。ありがとうな。」

首を横に振って気にするなど、少しばかりの嘘を混ぜて二度目のお礼を言った。

「うん、ごめんね。」

なのはは一言謝り、背を向けて行こうとするが、不意に振り返り。

「八神二佐、お仕事頑張ってください。」

などと、おどけた口調で敬礼をしてきた。

「はい、高町一等空尉も頑張ってください。」

思わず顔を綻ばせて、敬礼を返す。

互いに笑い合った後、なのはは戻って行った。

なのはが去った後も、はやては一人その場にしばらく残り思慮にふけていた。

よく考えてみれば、二度目の襲撃の被害はどれほどなんだろうか。

そんな事を、彼女は不意に思いついた。

「よし、行ってみよか。」

自分を鼓舞するように呟くと、頭の中でまたも先ほどの謎を頭の中でかき混ぜながら、彼女は再び捜査に赴いた。

第11話 混沌（後書き）

さて、二話連続投稿。これでようやく元データに追いつきました。
現在12話は鋭意執筆中です。

さて、Edge of Avenger 第10、11話。いかが
でしたでしょうか？

自分的にはだんだんぐだぐだ感が否めなくなってまいりました…頑
張ってはいるつもりなんです…

こちらも大事ですが、片方の作品も頑張ります。もし、見てないか
たがいらっしゃったら、是非ごらんになってください。

感想なんかくれるとうれしいです。

さて、では次回投稿でお会いしましょう。

作者でした。

12話 衝撃（前書き）

皆様こんにちわ、G・Cです。

およそ二ヶ月弱、読んでいた皆様申し訳ありませんでした。
なかなか執筆が進まなくなりまして。

と、まあ言い訳乙。現在この作品の優先度が下がっております、
そのためでもあります
再び言い訳乙。

そんな言い訳の嵐は置いておいて、ゆっくりしていったね!!!

12話 衝撃

第12話 衝撃：それは意識を貫く閃光

あれから数日が経つ。

管理局は先日と同様の襲撃が起こらない事に次第に緩み始めていた。一部例外はいたが…

ここにも、その緩んでいる男は居た。

「はぁ……。」

そう、ため息をつくのは彼、ゲイル・マリオネット。ため息の理由はフェイトである。

あの日以来、彼女はゲイルが心配なのかちよくちよく絡みに来ている。

当然彼はやんわりと、そして全力で彼女を回避しようとするが、常にそれは徒労に終わり、結局は捕まってしまう。

今もゲイルはその逃走の最中。

最近では、おちおち昼もゆっくりできない。

まあ、それもフェイトが来れば終わるのだが…

今ゲイルは少し離れた広場に近い公園のベンチに居る。

外まで来たって無駄なのは予想はついたが、試さずには居られないのが人情。

何というか、ここまでくると、器が違うというか底知れぬ意思の強さが彼女にはある。

おかげでゲイルは疲れたと思ってても疲れない自分にジレンマを感じる不思議な苛立ちを自分にぶつけて居た。

ため息はそこからである。

「もう、ほうつておいて欲しいよ…」

思わず呟く。心底いろんな意味で参っているのか、そこには彼がレン相手にしか見せないような砕けた様子がそこにあった。

「嫌だよ、だつてほうつておけないから。」

まあ、こういうのは俗に言うお決まりパターンと言うのか、ゲイルが呟いた瞬間に彼女はひょっこりと現れた。

予想はついていたが随分と早かった。

ゲイルは一瞬固まり、そのままベンチにコテンと倒れる。

「なあ、俺なんかミスした？」

倒れたまま、ゲイルはフェイトに向かずにけだるそうに話しかける。

「うーん、特に無いけど敢えて言うと…目立って…だから…かな。」

人差し指をこめかみにあてて首を傾げ、考えながらフェイトは答えた。

「敢えても何も、それが答えじゃないか…はあ…」

ゲイルはまたも観念したか、ベンチに座り直す。

目だけは死んだ魚の目みたいにけだるそうではあるが。

「お前、過保護って言われない？」

何度目になるか分からなくなってきたため息をつき、ゲイルはジトっとフェイトを一瞥する。

「うーん、友達に言われた事が有るかな。」

などとゲイルとは対照的に随分とのんびりとした口調で返す。

そんな会話を繰り返す。

ゲイルはと言えばそんな中、なんとかこの場から逃走するチャンスを伺うが、なかなか現れない。

隙という間隙が彼女に全くと言っていいほど存在しないからだ。

コイツ…昼休みの間俺を逃がす気がないな…

などと内心舌打ちをしたその時。

ゾクンッ

ゲイルの背筋に、何か、悪寒が

「?、どうかした?」

走った。

フェイトは何も感じていないのか先ほどから雰囲気は変わっていない。

だが、ゲイルはどこかしら敵意を感じていた。
濃密な、自分の頭に直接叩き込まれる吐き気を催すような嫌悪感抱ける、明確な敵意。

じゃあ、なんでコイツは感じない…?
危険察知なんか、俺なんかより遥かに…

考えてても始まりはしない。ゲイルはベンチから立ち上がった。

フェイトから見れば、ただ違和感を出し、何も言わず立ち上がっただけのゲイルであったため、とっさに腕を掴んだ。

「悪い、どうしても外せない用ができた。今日は見逃してくれ。」

フェイトが口を開く前にゲイルがフェイトに語りかけた。

ゲイルの言葉からあまりにもしつかりした意思が感じられたせいもあるのか、フェイトは思わず手を離れた。

「どうに、行くの?」

代わりに答えると言わんばかりの強い言葉。
昼休みの時間は僅か、にもかかわらずゲイルの言葉には嘘が全く、
無い。

「確認したい事が、出来た。」

先ほどと同じように、強い意思を感じるゲイルの口調。
恐らく嘘は無い。だが

「私も行く。何か感じたんでしょ？ だったら、一人より二人のほうが安全。」

だからこそフェイトは引き下がらなかった。

「……オーケー、相棒は、持ってるか？」

「！？、もちろん。」

ゲイルに受け入れられたのが意外だったか、それとも予想外の質問だったのか、一瞬驚いたように表情を変えるが、すぐにそれは凜とした物に変わった。

「なんとなく、なんとなくだが、俺の本能があつちにヤバい奴が居るって警鐘を鳴らしてる。」

ゲイルの向く先は市街地。

だが、フェイトにはそういう気配は微塵も感じない。
それでも、何故かゲイルの言葉を彼女は無視できなかった。

「わかった、じゃあ、行こう。」

ゲイルとフェイトは共に未知なる脅威の根源へと駆け出した。

S I D E S T U F F

朝、目が覚めた。

風が当たらない事から、俺は屋内で寝ているんだと自覚する。

今日はちよつとばかり気分がいい。

別に理由は無いが何となく、何となくすがすがしい気分だったから、エステイにちよつとばかり技を教えてやろう、そんなことを考えて立ち上がり、窓の外を眺める。

時刻はと言えば日の出直前。

朝とは言い難い時刻と風景だが、別段問題は無い。

「外の空気を吸うかな…。」

そんなことを呟くと、まるで俺のその言葉を待っていたように扉が開いた。

「朝には早いな、エステイ。」

振り向かずには答える。

息を呑む声が聞こえた。

その理由は俺が気がついたためか、起きていた事にか…後者だったから激しく心外だけど。

「起きているなら、話は早い。スタッフ、少し付き合ってくれ。」

そんな事だろうと思ったよ。

やれやれと感じながら俺は壁にたてかけて置いた、自分の相棒を手
に取って腰に挿す。

「オーケー、お前の目掛けが俺の役割だからな。」

柄じゃないな。苦笑いを浮かべているのが自分でも分かる。

ひとしきり打ち合う

数にして20ほど

打ち合った事の感想については

才能。才能を感じずには居られぬ太刀筋。
もしくはそれに準ずる何か。

ただ、経験が足りないという印象がある。

一撃一撃に重みを感じられない、もちろん物理的ではなく一撃一撃
に感じられる気迫、気概、気力。

ただ、俺と違って純粋な才能の塊であるのは事実。
技だけならば、俺を遥かに凌ぐ事になるだろうな。

「エステイ。」

ひとしきり打ち終えた後、俺は剣を鞘にしまい奴を見据えた。

「なんだ。」

淡泊な呼びかけに淡泊な返事。
状況下には適した対応だ。

「お前にちよつと面白い物を教えてやる。」

思わず不敵に笑ってしまう。

随分と意外だったのか、エステイはしばらく言葉を返さなかった。

「……それは有り難い。で、それは技か？能力か？」

表情をピクリとも変えない、ちよつと納得行かないが、まあいいか。

「技であり、お前の能力となる。戦う相手を選ぶ力だ。」

訝しげな視線がこちらに投げかけられた。
そう怖い顔をするな。

「なに、卑怯つて訳じゃない。お前が出す殺気やら、闘志の認識を
少しばかりずらすだけだ。」

今度は理解不能とも言いたいのか、エステイはため息をつき始めた。

「スタッフ、そんな事は意図的にできる物じゃない。僕にはそういう事は無意識下でやっているからな。」

エステイはまるで謙遜をしているように見える。
全く、ため息をつきたいのはこっちだ馬鹿。

「あのな、そういうのを世間一般的に、才能って言うんだ。少しコツを教えるようなモンだから黙って聞け。」

「む……。」

俺の言葉がよほど釈然としなかったのか、黙りはするも、表情は苦い。

まあ、気にはしないけど

「人って言うのは、まず相手を見た目で決める。そして次に決めるのは相手の出す雰囲気、次に性格。これが前提…いいな？」

淡々と説明を始め、尋ねる。

これが分からないと話にならないからな。

「続けてくれ。」

「そして、それから人は対象に向かって評価する。ここからが大事。エステイ、お前は虫相手に死力を尽くす気になるか？」

「なれない、もちろん、一般的な虫ならばな。」

「そう、俺が教えるのはそういう意味だ、どんな人間でも存在すら度外視しちまうって奴はすべからく存在する。つまりは認識阻害だな。例えば、いくら弱者が吠えた所でお前は歯牙にもかけない。弱者には相応の気概が無いからな。つまり、そういう認識を特定の物

に行えれば、相手を選ぶ事も不可能じゃない。」

「なるほど、その理屈をお前は僕に教えると。」

理解が早いってのは助かるね、教えるこちらのテンションも上がるという物だ。

「そうだ。まあ理屈自体は先ほど説明した。コツに関しては、これ一つ。【自分を弱者と名乗れ】。これだけだ。」

俺は自分でも分かるくらい、自信ありげに言った。
理解されるつもりは殆ど皆無だったけど。

「つまり、弱者になりきれと、偽りを持たず、謙遜ですら無く、弱者になりきれと。そういう事が。」

だが、エステイには何となく掴めたらしく。考え込むように手を口に当てて唸っている。

「いわゆる自己暗示に近いモンだ、この場合は相手も暗示にかけてるけどな」

「なるほど、相手の無意識下に投げかける物が、…やってみよう。」

エステイは目を瞑る。

多分、自身への暗示だろうな。

「そうだ、それでいい、他者の認識をずらす、それを心がけると同時に、自分を騙せ。」

エステイの自己解釈の良さは驚愕に値する物だった。数分もかからないうちにあいつの気配が書き換わる。

「……どうだ…？」

眼が開く。その視線は普通の物なら弱者のそれに見える。だが俺にはそんな物は通じない。成功には変わりがないがな。

「流石だな。完璧だよ。」

全く、こいつの才能にはほとほと呆れる。

「名はなんという…」

俺の淡白な返しにエステイは何故か随分と嬉しそうに呟く。

「…概念操作だ。俺はそう呼んでいる。」
オペレート・スタッフ

エステイの感動を破るのも無粋だから、少し静かにかえしてやった。

「そうか。」

エステイも呟くように返す。

ちよつと俺の奴を見せようかと思つたが、その必要は無いか。

俺が黙つてあいつから離れようとしたその時。

「スタッフ。」

「なんだ？」

エステイの呼びかけに振り返らずに答える。

「ありがとう。」

あいつらしい礼の言葉が返ってきた。
思わず顔が綻ぶ。

「なあに、お前が赴く前なんだ。技の一つや二つ与えるのが筋つてもんだろ？」

問いかけるように言葉を放つも、俺はあいつの答えはまたずにそのまま自分の部屋があるあいつらの家に歩いていった。

SIDE OUT

時間を元に戻し、ここミッド市街地。

エステイは自身の魔法陣で足場を作りつつ空を駆ける。

朝方、スタッフに教授された概念操作を扱いながら

己を之しめる。

弱者弱者弱者弱者弱者弱者。

自分自身すら騙す。

弱者弱者弱者弱者弱者弱者。

「始める…。」

呟くと共に自身のデバイスを戦闘の形に具現化させると同時に意識を戦闘に切り替える。

そこに影が二つ

「来たか……！？」

現れた二つの影に彼は驚く。

「お前はこの間の…。」

「仮面の人…。」

現れたのは先日エスティと刃を交えた、金色の髪的女と、眼鏡の男。2人も驚きを隠せないのか各々が呟く。

「ちっ…。」

二振りの剣に込める力を強める。
思わぬ誤算、まさか金色がここに来るとは思ってもいなかったか、仮面の奥の表情を僅かに曇らす。

「ふっ…どうした？2対1だぞ？僕を屠る（ほふる）絶好のチャンスじゃないか？」

あくまでも自分は上、もはや概念の操作も止めて、全力で目の前の敵を眼中に射止める。

「「!？」」

こちらの明確とも取れる殺意を感じ取ったか2人は同時にこちらに踏み込んだ。

それが、ここにいる者に対しての開戦の合図となった。

「甘い！」

二本の剣で二つの剣戟を受け止める。

ガキンツという金属独特の音が大気を震わす。

「ッ!？」

さすがに2人の体重が合わさった一撃は体に答えたか。

エスティの体は真下に一瞬押さえつけられたように動かなくなる。

その隙を見失う2人ではない。

「でええやあああ！」

「はああああ！」

二つの剣戟が今度は左右からエスティを狙う。

視認はできるが、体がついていかない。そんな状態のエスティ。

「ちっ…。」

全身のバネを全力で使い地を蹴る。

跳躍と共に2つの斬撃をなんとか回避する。

再び先ほどの金属特有の音が響く。

そして、防戦ばかりのエスティではない。

「うおおおおおお！」

空中でクルンツと回転し、逆さま体制となり、足元に再び足場を展開。強く蹴飛ばし推進力を得て、眼鏡の男に向かいありえぬスピードで懷に潜り込み。

剣を一振りに一閃。

それで絶命…ではなかった。

男はなんとか剣を構え直し、エスティの一撃をきちんと捌いていた。

「おおおおおお！」

エステイに呆ける暇は無い。金の女性が攻撃の直後に襲いかかる。

「ッ……。」

再び足元にある魔法陣を蹴飛ばし跳躍。

正に、間一髪。女性の刃はエステイの髪を切り裂きハラハラと黒が舞う。

これが、空中でのエステイの戦い方。

足場を精製することにより空中での早駆けを可能とし、生み出した推進力で敵を刃で打ち砕く。

彼が敵を屠^{ほふる}る為に作り出した空戦。

再び空中で回転し、体制を立て直しながら構えを直す。

「はあっ…はあっ…」

一瞬。ここまで一瞬のような攻防の繰り返し。

構えを保ったままエステイは肩をわずかに上下させていた。

「フェイト、一気に叩くぞ、合わせてくれ。」

「わかった。ゲイル。」

眼鏡のゲイルと呼ばれた男がフェイトという女性に呼びかけるよう

に言う。

それは、長期戦を許さない短期決戦を表明する言葉。

頭の情報を整理する余裕すら無い。

踏み込んで来たゲイルはエステイに袈裟切りに斜めに剣を振り下ろす。

普段ならば、カウンターも容易な切りかかり。

だが、フェイトの存在がエステイの反撃を許さない。

エステイの剣による防御が成立すると同時にフェイトの鉄槌のようなザンバーによる斬撃が襲いかかる。

「ぐっ…！」

すかさず片方の剣で受け止めるが、片腕で耐えられぬ衝撃に体が軋む。

圧倒的に不利な状況。

フェイトの斬撃に続き、ゲイルの強烈で

「おおおらああああ！」

槍のような一撃がエステイの腹を見事に撃った。

「が　　。」

クリーンヒットした一撃にこれまでとは違う悲鳴すら上げて、エス

ティは吹き飛ぶ。

吹き飛びながらも、エステイはなんとか落下を防ごうと、魔法陣に着地する。

圧倒的。

敗北。

そんな考えがエステイの脳裏によぎる

「くっ……」

脳内で、何回シュミレートしても、結局は防戦一方となる。

だが敗北は許されない。赦されない。

立ち上がり目の前の敵を視界に収める。

考えるんじゃなく、感じる。直感^{センス}に身を委ねる。

エステイの中で何かが開ける気がしたその時。

「フェイトちゃん！」

別の影が現れた。

白い影と黒い影。

白い方は間違いなく

エース・オブ・エース

高町なのは…。

そして、もうひとつの黒い方。

「レン…」

エステイが呟くと共にレンもエステイを一瞥する。
だが、言葉は交わさなかった。

状況は一方的に悪くなるばかり

4対1。いくら彼に天性の物があってもここまで来るとひっくり返すのは至難となってくる。

否、もともと2対1だった状況すら、彼には難しかった。

そこにエース・オブ・エースが入れば、もはや敗北は必定となる。
自身の油断慢心が祟った結果だった。

エステイが覚悟を決め、踏み込もうと、力を込めた刹那。

4対1とはずいぶんな待遇じゃないかエステイ

そんな声と共に、まるで空気から溶け出したようにエステイの横にスタッフが現れ、その場の全員が凍りついた。

「よう、頑張ったな、エステイ。」

凍りついた空気の中、エステイの肩を叩きながら軽口を言う。

「何をしに来た。」

なんとかエステイが言葉を絞り出す。音量はかなり小さい。耳打ちのような物だ。

「なあに、お前のパートナーさんが置いてけぼり食らったって泣きついてきたんでな。」

視線を向けず、スタッフはエステイに返す。

そして、行けと言わんばかりにエステイを押した。

「面白い展開じゃないか。全く、油断をしないと思つたら、しつかり油断してたつてわけだ。弱者を引きずり出しても、おまけがついてくることは目に見えただろうに…」

スタッフはクスクスと笑いながら眼前の4人を見据え、エステイをからかうように叱咤する。

エステイもそれは理解しているのか、何も言い返しはしない。その態度がおきに召したのか、スタッフ表情をいつもとは違う物へと変えた。

「いいだろう、往けるところまで付き合つてやる・・・我が御名はスタッフ、我が剣にてこれより汝に助太刀いたす！」

鞘から剣を引き抜き、空中に突き立てて、高らかに叫ぶ。

マリに合図を送れ。

そして、エステイにだけ聞こえる声量で伝える。

「……………任せる。先に戻つてぞ。」

エステイは、どこかに隠れるマリの援護にて、転移に取りかかる。

「！？逃がす」

「小僧、そこから踏み出すなら我が敵として認識するが？」

ゲイルの素早い動きは、スタッフから放たれる眼光にピタリと止められる。

「やる気があるなら、全員で来い、見せてやろつか？
お前らとの絶対的な力の差を。」

場の空気が張り詰める。

まるで弦が引き絞られるかのよう。

「ッ……。ん？フェイト（なのはさん）どうした（どうかしました）？」

ゲイルとレンの言葉が被る。それもそのはず、なのはとフェイトは先ほども、わなわなと震えている。

それは決して畏怖の念ではなく、目の前の人物の存在が信じられない。という物。

「ど、どうして…」

「貴方が…」

なのはとフェイトの言葉が繋がる。

「「どうして貴方がここにいるの！？ゴールド・チャース！」」

二人の声が同時に大気に響く。

スタッフは、大した動揺を見せてはいないが、その顔は険しさを増した。

そして

「逆に問おう。なぜお前ら小娘が我が真名を語る。概念の使徒、スタッフの真名を、何故、あんたらが語る？」

絶対零度の視線を持ってその言葉を放った。

「スタッフ、これはどういう事だ。」

まだ転移してはいなかったのか、魔法陣の上に立ったままスタッフに問いかける。

「話は、後だ。全部話してやる。行け！」

エステイはスタッフに答ええないまま、そのまま転移により撤退した。

「に、逃がした…。」

言葉を唯一話したのはゲイル。

レンは威圧感で動けない、なのは、フェイトは固まったまま。

「まあ、いい。さて、お前らに選択肢をやろう。」

ここで俺にやられるも良し。

俺を逃し撤退するも良し。

選べ。」

剣を下ろすように地面に向ければ腰を僅かに落とす。

それが彼の構えなのか、もはや寸分たりとも隙が無い。

「ゲイル…」

「レン…」

「「退くよ…いい…？」」

なのはとフェイトは静かに二人に言う。

ゲイルとレンは予想通りの言葉だったためか、静かに頷く。

「そう、それが正解。今のお前らの出せる実力じゃあ、俺は殺れない。」

小さくうめくような声が聞こえる。

悔しさに誰かが声を上げたのだろうか。

「ああ、良い目だ。命を糧とし闘志の炎が揺らめいている。」

誰に言うでもなく、スタッフは呟く。

それは4人の事なのか、若しくは誰か1人に対してか、それはわからない。

その言葉を聞くと共に4人はスタッフの前から撤退した。

「やれやれ…可能性ってやつがいかに薄っぺらい数値だったのかが良く分かったよ。」

構えを解いて剣をそのまま鞘へとしまふ。

カチンツという音と共に剣が鞘に収まった。

「さて、戻るかね、怖いお兄さんが俺をお待ちかねだ。」

スタッフが苦笑いしつつ1人愚痴り、何かをポツリと呟くと、彼の姿はまるでそこにはなかったかのようにかき消えた。

ここから先は、スタッフら、なのはらとコロコロ視点を变えます。
ご注意をby作者

あれから数時間が経過した。

時間を置いてから戻ってきたスタッフを待っていたのは厳しい目つきをしたエスティと、彼とスタッフを不安げに交互に見つめるマリがそこにいた。

「おおお二人さんでお迎えか、嬉しいね。」

クツクツと何が楽しいか、皮肉を言うように笑っているスタッフ。だが、エスティはクスリとも笑わない。

「さ、話してもらおう。お前が何故僕らの敵である奴らと知人であるのかを。」

「……………いいだろう。」

静かに息を吐き出しながら、穏やかな口調でありながら目線が鋭くなっていく。

その視線にビクリツとマリが少し震え上がった。

「悪いな、今からちよいと昔話をする。俺の根底に触れる物になるんでな。」

「構わん、続けてくれ。」

エスティは彼の視線にも動じず、腕組みをしたまま静かな表情をしている。

「オーケ。ゆつくり話すか。」

なのはとフェイトは、自らの業務を速やかに終えて、小学校からの親友のはやてをとある喫茶店に呼び出した。

「どうしたん？急に話って。」

はやてはいつもの笑顔を浮かべてなのはらに話しかけた。

事の顛末…つまり数時間前に起きた戦闘の出来事が伝えられた。

戦闘がまた起きた。という事実が管理局を揺らしたせいか、正確な話は当事者と担当者くらいにしか伝わっていなかったからだ。

「懐かしいなあー…」

はやては昔を懐かしむように微笑んでいる。

昔と言っても数年ほど前の話なのだが。

「私たちも少し驚いちゃって、思わずフルネームを叫んじやったんだ…ね、フェイトちゃん？」

苦い顔をしたままなのはフェイトに視線を送る。

フェイトはコクリと頷きながら相槌で返した。

「確か、ゴールド…って言ったっけ？ちょっぴり髪の毛が綺麗な強い人やったなあ。」

はやての相変わらぬ穏やかな口調に2人はようやく表情が落ち着いていた。

「うん、私となのはの恩人でもあったよね。」

手元のコーヒーの黒い水面を見つめながらフェイトが呟く。
数年前の話なのに、ずいぶんと古ぼけた記憶のような懐かしさ。

三人はしばらく黙り込んでしまった。

スタッフたち三人もまた、沈黙していた。

スタッフが瞳を閉じたまま、まるで回想をしているように何も語らないからだ。

「あいつらとは、多分。この時系列にて数年前。正確な数字はわからないが、それくらいだ。」

彼の静かな声は部屋によく響いた。

「俺がこのラインに初めて召喚された頃の話だよ。」

「確か、最初に出会って、なのはちゃんたちがいきなり助けられた……やったっけ。」

はやてが口を開く。

三人の中で静かに時が逆廻りし始める。

「うん、あれは少し危なかったかな。」

コーヒーカップから視線を上げ、苦笑いをしてフェイトは声をあげる。

「出会いなんて、単なる偶然だ。まあ、時にそれは必然になるが、ここでは関係ない話：とにかく、このラインで最初に剣を振るったのはあいつらのためだった。」

語り部は聞き手にゆっくりと話しかける。
聞き手は静かに、耳を、傾ける。

「あの時、助けてくれたのもあの言葉だったよね。」

なのははフェイトの顔を覗き込む。

「うん、まさか聞かされる立場になるとは思わなかった。」

フェイトの癖だろうか、楽しげな表情にどこか苦いところがある。

「ああ、始まりも確か…エステイ。お前にさっき言ったあの言葉だよ。」

「……………?」

エステイのその反応は、彼の言葉の意が汲めなかったか、はたまた自分を追い詰めた強敵が、自身と同じ状況だった事への驚きか。

「「我が御名はスタッフ、我が剣にてこれより汝らに助太刀いたす！」」

時が逆廻る。過去への回想へと
クルクル、クルクル…

12話 衝撃（後書き）

久々の更新です。今一度謝罪を、すみませんでした。

さて、次話から過去編突入となります。一人、女のキャラを一瞬だけ出そうと思っているのですが、キャラ名がいまいち固まりません。そこで、読者様から応募をしたいと思います。思いつきもよし、ある程度由来を作ってもよし：せつかくですので、テーマを決めておきます。

「決意」または「意思」、「信念」

とまあ、つまり心関係ですね。皆様のアイディアお待ちしております。

では、次回投稿にてまたお会いしましょう

キャラクターガイド Vol.1・? (前書き)

どうも、ひさしぶりの更新です。活動報告にちょっとこの作品についてお知らせがあるので、これを読んだ方は活動報告に目を通してください。

大事なお知らせですので、読んでいただけるとうれしいです。

キャラクターガイド Vol. ？

ゲイル・マリオネット

身長：172程度

容姿に関しては本編に記載の通りで、黒ぶちの眼鏡をかけていて短髪、黒髪、実際に視力が悪いのかどうかは不明。

剣を扱ってはいるが才能自体はあまり無い。あつて凡人より少しある程度の才能。現在の剣の腕は全て努力で培ってきたもの。

ただ、魔力量に関しては折り紙つきで、ランクにしてAAA+程度というニアSランク。だが彼自身のデバイスの機能によりリミッターとしてA程度にまで下げられている。

戦闘スタイルに関しては近接を主体に置いたオールラウンド。

だが近接を重きにおいているために、中遠距離に関しての能力には劣りがある。

サテライト・システムというよくわからない固有能力を所持。月との接続で、魔力供給を得られるようだが、詳細は今のところ伏せます。

所有デバイスはライトブリンガー

待機時はデバイスが戦闘時のフォルム：ブレイドフォルムがデフォルメ化されたもので、色も金色に塗り固められており、金色の鎖で括られる。

ブレイドフォルム

戦闘時に主に使用する戦闘フォルム。

その見た目は文字通りの西洋剣で金色の刃というおよそ戦いに使うとは思えないような華美な色合いをしている。

切れ味自体はそこそこ高い、ただ、非殺傷設定のために斬撃ではなく打撃武器となっている。

サテライトフォルム

ゲイルがサテライト・システムを使用時や、遠距離の戦いに展開されるフォルム。形容は、杖のような持ち手に、その先にきらめく翼のような花弁が5枚ひろがり真ん中にアンテナのような棒が突き立つ形状。

レン・ヤマグチ

身長：165前後

ゲイルのパートナー的立ち位置。数少ないゲイルの友人でもある。彼とどう知り合ったかについては、本編をお楽しみください。

容姿に関しては、肩までのびる茶色の髪が、先のほうでカールがかっている。本人曰く「特別な処置は施してない」らしい。

比較的スレンダーな体型ではあるが、実は出るところはけっこう出ている。と、いっても原作の方々みたいな激しい物ではなく、一般的な考えでの話。

だが、なぜかゲイルに貧乳扱いされる。戦闘スタイルは、完全な遠距離、中距離でも戦闘はできる。

実は近接で戦えない自身の思考能力の適正などに劣等感を感じている。本編での記述通り、魔力量の数値が一般的な魔導師より劣っている。

大体C程度。

ただ、本人にそれを補える魔力運用の才能があるためなんとか普通の魔導師よりは優秀ではあるが、ゲイルと違うのは一流にはなれないただの「有能」である。本人に自覚は無いが、そこに関しても悩みを持っている。

所有デバイス、ヴェルヴェット・ムーン

待機フォルムは赤い正方形のサイコロのような形をしている。レン本人の趣向からアクセサリーにはしていない。

ロッドフォルム

基本的な戦闘時においての戦闘フォルム。赤を主色とした飾り気の無いタダの長い棍棒にも見て取れる杖。杖には螺旋状に下から先端まで黒い線が描かれている。

エステイ・ドライ

身長は176程度

黒い髪で髪質の問題が常に逆立っている、俗にいうツンツン頭。本人には軽いコンプレックス持ちでどうにかしたいと考えている。

本編の主人公。とはいっても第二主人公的な感じ。

基本的には天才肌。本人は自身のことを凡愚とよんでいるが戦闘能力はゲイルよりかなり上手の人間。

現段階のゲイルの陸戦ランクはA+程度だが彼の能力はAA+程度。攻撃能力に特化したバリアジャケットは、強力な攻撃が当たれば即撃墜レベルの耐久度だが本人の回避能力と反応レベルは常人を遥かに上回っているレベルで、それを補っている。

管理局に対して強い憎悪を持っていたが、現在はそれよりも何か強い意志で動いているようにも伺える。

スタッフ曰く『才能の塊』とのこと

戦闘スタイル

完全に近接を重きにおいている。中距離攻撃ができないこともないが、本人曰く「離れた攻撃は信頼性に欠ける」とのこと。

超スピードを出せる出力を有しておりフェイトのようにスピードで翻弄しながら戦闘を行う。

剣に関しては完全に我流。主な戦闘スタイルである二刀術も自身の戦いでもっとも汎用性が聞くと考えての選択で、自身も最も得意としているが、デバイスの関係で最強ではない。

一刀での戦いについては二刀とあまり大差は無いものの、加減などそういう細かい微調整がこちらでは効かない。だがデバイスの関係上彼が最大出力を有して戦うにはこちらがもっとも適している。

待機フォーム

水色のピアス。方耳だけで本人曰く邪魔にならないだとかなんとか一応インテリジェントデバイスなのだが、デバイス自体が彼の前以外で話さないためにストライジデバイスと勘違いしてしまうこともしばしば

ツヴァイ ジフツアーン (Zwei Giftzahn Form)
二本の双剣、刃は魔力刃で形成されており彼の魔力光と同じ水色。
柄の先端は魔力系で繋がれており、硬軟化、伸縮自在である。カー
トリッジリロードは柄の内部で行われる。リロードは右剣で行われ、
リロードで得た魔力は魔力系を通じて左剣へ電気と同等のスピード
で供給される。

キャラクターガイド Vol. ？ (後書き)

このあとがきにはほんぶんはありません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7548k/>

魔法少女リリカルなのは Edge of Avenger

2011年10月6日20時31分発行